

地域学入門

柳原 邦光

Introduction to Regional Sciences

YANAGIHARA Kunimitsu

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第14巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.14 / No.2

平成30年3月12日 発行 March 12, 2018

# 地域学入門

柳原邦光\*

## Introduction to Regional Sciences

YANAGIHARA Kunimitsu\*

キーワード：地域学， グローバル化， 個人化， わたし， 生の充実， ローカル， 移動， 自然， いのち， 死， 実践

Key Words: Regional Sciences, globalization, individualization, self, a satisfying life, local, immigration, nature, life, death, practice

本稿は、2017年7月2日に鳥取大学地域学部でおこなった教員免許更新授業「地域学入門」の講義原稿である。講義では、地域学部教員が共同執筆した『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす—』（ミネルヴァ書房、2011年）に基づいて地域学部の構想する地域学を紹介したが、ほかに筆者の地域学関係の論考<sup>1</sup>も加えた。この意味で、本稿で提示する地域学は、正しくは筆者の「わたしの地域学」というべきであろう。なお、教員免許更新授業では1回80分の講義を4回行うことになっているので、本稿も相当なボリュームになってしまった。そのことを大変申し訳なく思うが、地域に関心のある方の参考になればと思い、註を付した以外はほぼそのまま公表することにした。

## 1. はじめに

こんにちは。柳原邦光です。どうぞよろしくお願ひします。「地域学入門」ということで、これから地域学の話をしていきます。あらかじめお断りしておきますと、地域学という確立した学問があるわけではありませぬので、わたしにできることは、鳥取大学地域学部の教員が「地域学」をどのようなものとして考えてきたのか、どんな「地域学」を創ろうとしてきたのか、紹介することです。地域学部では、わたしを含めて学部教員11名で2011年にミネルヴァ書房から『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす—』という本を出版しました。教員のほかにも、学外で地域に関わって活動されている方々にコラムを執筆していただきました。今日は主にこの本のエッセンスを紹介する形で、「地域学」についてお話しします<sup>2</sup>。

最初に、出版に至った経緯からお話しすると、『地域学入門』は地域学部3年生の必修科目である「地域学総説」という授業での取り組みをベースにして生まれました。学生達は「総説」で地域学を学ぶのですが、教員は地域学をまとめた形で提示しなければなりません。しかし、これはかな

---

\* 鳥取大学地域学部地域学科

<sup>1</sup> 筆者の論考の多くは地域学部の『地域学論集』に掲載されているので、興味のある方は鳥取大学のディボジトリで検索していただきたい。また、本稿の内容や文章については、すでに発表した論稿と重複する場合があることをお断りしておく。

<sup>2</sup> 『地域学入門』の評価については、栗原彬「地域におけるボランティアな生き方—地域学への期待」、鳥取大学地域学研究会第2回大会（2011年度）講演・シンポジウム「地域学への期待と課題」（『地域学論集』第8巻第3号、2012年）を参照。

り重い課題です。地域学がどういうものか、総括できる段階にないからです。

もちろん、地域に関わる研究でしたら、すでにあります。最もよく知られているのは「エリア・スタディーズ」で、「地域研究」といいます。特定の地域を選んでそのありようを総的に分析するのですが、元々はアメリカの世界戦略の観点から出てきた研究です<sup>3</sup>。このほかに「地域科学」があります。これは地域を主に経済社会と捉えて、経済の観点から地域を分析し、その発展を実践的・政策的に考えるものです<sup>4</sup>。また、「地域学」と称するものも多々あります。この場合は、「東北学」とか「山形学」というようにほとんどが地域名を冠していますので、対象となる地域は限定されています。さらに、後述するように「地元学」という場合もあります。

文献を探してみますと、「地域学」というタイトルの文献もあります。たとえば、『地域学の構築』、『地域学への招待』、『はじめての地域学』<sup>5</sup>です。これらの文献は有益ですが、地域学としてまとまった形にはなっていません。ですから、地域学の定番といえるものはないのです。

地域学の必要性そのものは、はっきりと認識されています。日本学術会議地域研究委員会は、世界の抱える諸問題を解決するために地域学を推進しなければならない、と主張しています。2000年の「地域学の推進の必要性についての提言」や日本学術会議『日本の展望—学術からの提言 2010』をご覧くださいとよくわかります<sup>6</sup>。また、昨年、日本学術会議／地域研究委員会／地域学分会主催の公開シンポジウム「地域学のこれまでとこれから」が開催されました。このとき2名の方が基調講演をされ、ともに地域学を理論的に体系化する必要性を強調されました。そのあとのパネル報告では、地域学部教員の司会の下で地域学関係の大学・学部の取組が紹介されました。それぞれの大学で大変努力され苦勞されていることがよくわかりましたが、まだ地域学の体系化に着手するには至っていないようです。鳥取大学地域学部の場合、学部創設当初から「地域学の確立」を目指してきました。わたし自身は、理論的体系化というよりも「地域学に形を与える」ことに努めてきました。この2つはよく似ているようですが、根本的に違うと考えています。この問題については、講義の最後のところで説明します。

<sup>3</sup> 高谷好一(地域研究)は、地域に関わる学問について、地理学と民俗学の紹介から始めて、2つの地域研究(area study と regional science)と地域学との違いを次のように説明している。area study はひとつの地域を総合的に捉えようとするもので、生態学、社会学、歴史学、言語学、政治学や経済学などの専門家が参画・協同して地域の姿を描き出そうとしてきた。アメリカのベトナム研究に始まって政策的なものだったが、日本の場合は、文化人類学にかなり近い。regional science は、地域開発を科学的に行うための手法として出てきたもので、自然科学や経済を重視している。これに対して、新たに地域学が求められているのには2つ理由がある。すなわち、土地の誇りを掘り起す必要性と、土地の人たちが中心となった研究の必要性である。この地域学の場合、土地の人が研究主体として研究に参画し、自ら誇りを見出すことが重要である。area study が文化人類学的で第三者的、regional science は自然科学的で、開発のための技術学であるのに対して、地域学は超学術的で当事者的だというのである。高谷好一、2004、『地域学の構築—大学改革の基礎—』サンライズ出版、106-108、同『地域研究から自分学へ』、118-119。このほかイマニュエル・ウォーラーステイン、2006、『入門・世界システム分析』藤原書店、38-42を参照。

<sup>4</sup> もう少し説明すれば、地域科学は地域を何らかの目的で人為的に線引きされた空間とは考えていない。地域は、自然環境や政治・経済・文化など様々な要素が複雑に絡み合いつつも一定のまとまりをもった意味ある空間であり、人間の生活や幸福に深く関わる。それゆえ、諸学を総動員してこれらの諸要素の複雑な関係性とその変化をトータルに捉え、それに基づいて効果的な施策を考えて、人間の幸福の実現に貢献しようとするものである。W. アイサード、1980、『地域科学入門(1)』大明堂を参照。原書はWalter Isard, *Introduction to Regional Science*, New Jersey, 1975。鳥取大学地域学部の地域学も「客観的、構造的視点」として地域科学を組み込んでいる。

<sup>5</sup> 京都造形芸術大学編、編集責任中路正恒、2010、『地域学への招待(改訂版)』角川学芸出版、地域学研究会、2011、『はじめての地域学—「地域」が映し出す社会と経済』ミネルヴァ書房。

<sup>6</sup> 日本学術会議太平洋学術研究連絡委員会地域学研究専門委員会報告「地域学の推進の必要性についての提言」(2000年6月)、1-3を参照。併せて日本学術会議『日本の展望—学術からの提言 2010』を参照。

地域学が求められていることは、学部名を見てもわかります。国立大学で「地域」を最も早く学部名に取り入れたのは、岐阜大学の「地域科学部」で1997年のことです。次が鳥取大学です。1999年に「教育学部」が「教育地域科学部」になり、2004年に現在の「地域学部」になりました。最近では、金沢大学の「地域創造学類」、高知大学の「地域協働学部」があります。昨年度は、愛媛大学「社会共創学部」、宇都宮大学「地域デザイン科学部」、福井大学「国際地域学部」など、全部で10学部が新設されました。私立大学にも地域系の学部・学科がたくさんあります。したがって、地域学の存在意義は学術の世界で認識され、大学教育の場に波及しつつあるといえます。国も「地方創生」ということで、地域に力を入れるようになりました。問題は、地域学が語れるだけの中身をまだ備えていないことです。したがって、地域学に関わるものは、地域学を自ら創らなければなりません。

地域学部では、3年生の必修科目である「地域学総説」が「地域学を創る」場となってきました。そのため、毎年10名くらいの教員が参加して、授業プランの作成から授業運営、「地域学に形を与えること」まで、数え切れないほど意見交換を重ねてきました。わたし自身は、授業に関わるだけでなく、その成果を論文<sup>7</sup>で発表してきました。『地域学入門』は不十分なものではありますが、わたしたちの努力の結晶ともいえるべきものです。

さて、今日は、地域学について最も基本的なところをお話します。「地域学とは何か」、「地域学を学ぶ必要性は何か」、「地域学の目指すものは何か」です。これは学問として当然の問いではありますが、答えるに難しい課題です。これから紹介するのは、基本的に鳥取大学地域学部が『地域学入門』で提示した地域学です。

『地域学入門』出版以来、はや6年がたちました。いうまでもないことですが、地域学に完成はありません。絶えず書き加えられ、書き変えられていきます。『地域学入門』についても同じことがいえます。出版は教員にとって大きな喜びでしたが、出版とほぼ同じ頃、東日本大震災が起きてしまいました。多数の人命を奪い生活を破壊した大自然の営み、それに圧倒されながらも助け合って生きる東北の人達の逞しさと美しさ、世界の様々な国や地域からの心温まる援助、復興への道を通して見えてきた様々な問題。このような急展開に直面して、『地域学入門』には何かが足りない、そういう思いが募っていきました。それはいったい何なのか。この問題に取り組んで、地域学にさらに深みを与えなければならない、と思うようになりました。こうしたことも含めて、現時点でのわたしたちの地域学を、わたし個人の意見もまじえながら、これから紹介します。

最初に「なぜ、今、地域なのか」という問題を、やや抽象的になりますが、お話します。次に、「地域から立ち上がる様々な動き」ということで、地域学部で講演していただいた学外講師の方々のお話を紹介しながら、「地域学としてわたしたちが視野に入れるべき重要なポイントとは何か」を具体的に考えてみます。さらに、「東日本大震災から見えてきたもの 地域学の目指す究極的な目的は何なのか」として、被災者の経験やそれに基づいた研究を紹介しながら「今、わたしたちが見つめ続けるべきものは何か」を考えます。最後に、「地域をとりもどす」ということで、地域学部の構想する〈地域学〉をまとめてお話することにします。

今日のお話の組み立て方について、もう少し詳しく紹介しておきますと、第2章の「なぜ、いま、地域なのか」は、少し抽象的で難しいお話になるかもしれません。といいますのは、この章では、この問題を、西欧に始まる近代社会の再検討という、非常に大きなパースペクティブから検討してい

<sup>7</sup> 「地域学総説の挑戦」シリーズや「地域学を創る」シリーズなど（いずれも『地域学論集』に掲載）。

くからです。ベースになるのは、学術的な知識で、どうしても抽象的になってしまいます。

第3章から第5章では、様々な実践的取り組みを紹介しながら「地域学として見つめ続けるべきものは何か、吸収すべきはなにか」を考えます。なぜこのような構成にしているかといいますと、わたしたちの地域学は、学術的な知、アカデミックな知だけでなく、もう1つの知、生活の現場から実践を通して立ち上がってくる「生活の知」ですね、この2つの知が重なる形で創られると考えているからです。学術の領域と生活実践の現場との間の絶えざる往復運動が「地域学を創る」ということです<sup>8</sup>。

## II. なぜ、いま、地域なのか

### 1. システムに支えられた生活と「自由」

それでは、「なぜ、いま、地域なのか」に入ります。最初に、学生と話をしている気づいたことから考えてみます。ある学生が卒業研究で自分の住んでいる地域を調べることになり、自分のおじいさんやおばあさん、近所の年配の人たちにインタビューをしました。いろいろ話を聞いて次のように思ったそうです。「昔の人たちはみんな助け合って暮らしていた。そうしないと生きていけなかったからだ。だから、時にはいいたいことがあっても何もいわず、じっと耐えるしかなかった。それに比べると、自分たちは人に頼らずに一人で生きていくことができる。自由で自立している。それだけ社会はよくなった。わたしたちは幸せだ」というのです。

この話には考えさせられました。確かに、今は特に誰かの世話にならなくても、とりあえず生きていくことができます。お金さえ払えばなんでも簡単に手に入るのですから、時間をかけて自分でつくるよりも、お金を出して買って消費すればいいのです。昔のように自分の身体を使わなくてすみみますので、自由な時間ができて、したいことができます。誰かの世話にならなくても大丈夫のような気がします。これは本当にありがたいことです。しかし、疑問もあります。これは、学生がいうように、自由になって、自立しているということでしょうか。

少し考えてみればわかることですが、わたしたちの生活は他の誰かが作物や製品・商品を作り、流通させているからこそできる生活です。電気やガス、水道、交通、通信、みんなそうです。顔も知らない無数の人たちが働き努力しているので、今の快適な生活があるのです。もちろん、わたしたちの誰もがそうした役割を分担して果たしていますので、互いに助け合っているわけですが、それを意識せずに暮らしています。

ところで、東日本大震災ではあることに気づきました。たとえば、テレビを見ていて嫌な感じがしたことがあります。ニュースで、道路が壊れて行き来できなくなった集落の人たちがヘリコプターで救出されるシーンを幾度となく目にしました。マスコミは「孤立した集落」という表現を使って、大変な事態だと叫んでいましたが、わたしはその言葉に疑問を感じたのです。

わたしの子どもの頃を思い出してみると、我が家は貧乏でしたが、農家でしたので米と野菜はありました。漬物や豆腐はもちろんのこと、随分以前は味噌も醤油も家でつくっていました。水は山から引いていましたので、水道料金を支払ったことはありません。また雑木を伐って薪にして、ご飯を炊いたり風呂を沸かしたりしていました。冬は雪のためによく停電しましたが、家が暗くなった程度で生活できないことはありませんでした。生活に必要なものをある程度自前で調達してい

<sup>8</sup> 生活の知を重視することは自ずと人と自然との関係の見直しにつながる。この見直しや生活の知の再評価については、『農村文化運動』195号（農山漁村文化協会、2010年1月）所収の「5 経済グローバリゼーションと地域の再生」を参照。

たからです。そんな生活をした経験があったために、「孤立した」とか「救出される」とかいわれると、なんとなく抵抗を感じたのです。ところが、今のわたしの生活を考えてみれば、多くの人たちと同じように、たちまち困った事態に陥ってしまうでしょう。水や食料はどうするのか。煮炊きは？暖房は？など、何もかもが自分ではどうにもならないことばかりです。これは一体どうしたことでしょうか。

今の私たちの生活では、生きていくために必要なものを自分自身で用意することはほとんどありません。ほとんどのものを、お金を払って手に入れています。生活を支えているのは、水道や電気、ガスなど巨大なシステムです。そのおかげで、直接には誰の世話にもならず、あるいは人とあまり関わらなくても、暮らすことができるのです。しかし、システムを利用するにはお金がかかりますので、どうしても「お金、お金」になってしまいます。

大震災はこのような暮らしの脆さ、危うさを教えてくれました。人間は巨大システムをつくりあげてきましたが、大自然の前ではなすすべもありませんでした。システムが崩壊してしまうと、あるいはシステムから遮断されてしまうと、自分ではもうどうにもできません。電気や水を断たれれば、ご飯を炊くこともできず、生きていくこと自体が困難になってしまいます。また、ほとんどすべてのものを外から手に入れていますので、外からの情報が得られないと、とてつもなく不安になってしまいます。システムがなければ、わたしたちの一人ひとりには本当に無力で、なににもできないのです。これがわたしたちの暮らしの実相でしょう。

ただ、大震災を通して見えてきたのは、情けないことばかりではありません。システムを失ったとき現れてきたのは、身近な人たちや見知らぬ人たちの、互いに助け合おう、支え合おうとする姿でした。国際的な励ましの声や支援もありました。こうした動きにとっても感動し、勇気づけられました。他人に無関心な時代だといわれていましたが、大自然の脅威を前にして、支え合おうという心が自ずと表に現れてきたということでしょう。わたしたちは大震災から、人が人として生きるとはどういうことなのか、生のありかたを根本から考え直すよう求められているように思います。

## 2. 「地域」という言葉のあいまいさ

次に、わたしの立ち位置をお話しておきます。今でこそ地域学について語っていますが、こんなことになるとは夢にも思っていませんでした。わたしは、大学では、最初に法学部で法律学を、次に文学部で歴史学を学びました。大学院では文学研究科で西洋史学を専攻しました。鳥取大学には、当時は教育学部でしたが、西洋史を講義しにやってきました。ところが、その学部が「地域」を研究教育する学部になりました。それを最初に知らされたとき、真っ先に思ったのは、「え！地域？ どうして地域を研究しなければならないのか」という疑問でした。いや、正直にいいますと、非常に強い反発がありました。

わたしは島根県の大田市で生まれ育ちました。山奥の小さな町でしたので、みんな顔見知りでした。特別嫌なことを経験したわけではありませんが、なんとなしに息苦しさを感じていました。それで大学進学を機に大阪に出ました。やはり都会への憧れがありました。それに、山の中の狭い町を出て、もう少し大きな世界で暮らしたいという気持ちもありました。たとえば、実家で空を見上げますと、ぐるっと山の縁に取り囲まれています。空が額縁に入っているようなものです。また山に登れば、自分たちの暮らしているところが見えます。山間の狭いところに住んでいることが一目でわかります。広いところで暮らしてみたかったのです。

教育学部が「教育地域科学部」に改組されたとき、「これからは、地域を研究してください」とい

われました。そのとき自分でも驚くほど強い拒否感が体の中から湧きあがってきましたが、その背景にはこのような事情があったのです。当時は、「地域」を、人の行動、考え方や感じ方を制約する疎ましいもの、わずらわしいものだ、と思っていたのです。もちろん、今でもこの思いが完全に払拭されたわけではありません。ここ鳥取で暮らすようになって24年がすぎましたが、その間に「地域」で生きることの辛さも経験しました。ですから、「なぜ、いま、地域なのか」という問いは、わたし自身にとっても避けて通ることのできない問いなのです。わたしはこのような疑問や怒りを出発点として地域と地域学について考えてきました。「なぜ、いま、地域なのか」という問いに対して、「地域はいいぞ」とか「地域大好き」というような前提で取り組んできたわけではないのです。

さて、それでは、「なぜ、今、地域なのか」という問題を身近なところから考えてみます。わたしたちは「地域」という言葉を日常的に使っています。平凡な言葉ですが、「地域って何ですか？」と聞かれたら、答えることができますか。そもそも「地域」という言葉は何を指しているのでしょうか。「地域で子どもを守る」とか、「地域を巻き込んで」といういい方をよく聞きますが、こういふときの「地域」は、おそらく自分たちが生活している場のことでしょう。「集落」とか「町」とか、「学区」かもしれません。あるいは、「市町村」や「都道府県」でしょうか。場合によっては、さらに広い空間、ときには国家さえ越えるような空間をいうこともあります。東アジアやEUなどです。

また、「地域」というとき、そこで暮らしている人々や、人々が結んでいる何らかの関係や文化を含んでいるようにも思います。この意味だと、「地域」は「地元」という言葉に重なります。この他に「地方」という言葉もあります。国は「地方創生」ですね。こうしたことを考えますと、「地域」という言葉で具体的に思い描くものは、人によって、あるいは時と場所によって、違うのかもしれませんが。「地域」は、範囲や意味があいまいなままに、なんとなく通じる言葉として、使われているといえるでしょう。それにしても不思議です。わたしが学生だった1970年代後半には、法律や学術の世界ではともかく、一般には「地域」といういい方をしなかったように思います。いつからこんなに頻繁に、しかも何らかの期待を込めて広く使われるようになったのでしょうか。

新しい言葉は時代の何かを映し出していると考えられますが、そうだとすれば、このように「地域」が広く一般に用いられるようになったことは、社会が既存の言葉では表せない何かを求めている、ということでしょう。そうだとすれば、「なぜ、今、地域なのか」という問いは、決して小さな問いではなくて、大きな問題に関わっていると考えるべきではないでしょうか。今日は、このような観点から、「地域」を時代の大きな文脈のなかで考えてみます。

### 3. 近代世界の抱える諸問題

この問題について、国家の問題から検討を始めます。よく「中央と地方」といいますが、この場合、「地方」は権力や文化の中心である「中央」に対置される言葉です。そこでは権力関係や優劣関係が前提となっています。要するに、「地方」の「中央」への従属という関係です。しかし、「地域」の場合は違います。「中央」とか「中心」という優劣関係の発想ではありません。わたしたちが「地域」というとき、それぞれの特質とそれが人々の暮らしにもっている意味とを等しく認め、尊重する立場に立っています。

「中央と地方」の問題から始めたのは、優劣関係や中心とそうでないところという意識があるからです。それは根拠のないことではなくて、国家の役割が大きいことと関係しています。実際、わたしたちの生活は国家と密接な関係にありますので、「地域」をまずは国家との関係から考えてみます。

先ほどわたしたちの生活は様々な巨大システムによって支えられているといいました。このシス

テムの中に「制度」も含めて考えてみます。身近なところでいえば、制度のとして学校を挙げることができます。日本では、ほぼ2人に1人が小学校から大学まで14年から16年もの長い間学んでいます。そのうち9年間は義務教育です。国家が教育を受けることを権利として認め、同時に義務づけているのです。これは、読み書き計算や公の場所での振る舞い方を含めて、社会で一人前の人間として生きていくために最低限必要なものを身につけることを国家がすべての人に要求し、保障しているということです。義務教育がなければ、収入が十分でない家庭の子は教育が受けられなくなり、大変なハンデを抱えることとなります。今は、奨学金制度がありますので、親の収入が十分でなくても進学して、生れ落ちた環境とは別の世界で仕事することもできます。わたしが大学の教員として皆さんの前でお話できるのは、両親の大変な努力があったからですが、制度のおかげでもあるのです。

このほかに、失業保険や生活保護、退職後の年金制度、国民健康保険制度、介護保険制度もあります。これらの制度があるおかげで、仕事を失っても、あるいは歳をとって仕事ができなくなっても、生活ができるのです。病気になっても病院で診察してもらうことができるのです。わたしたちが人に頼らなくても生活できるとつい思ってしまうのは、経済的なシステムなどのほかに、こういう様々な制度があるからなのです。

それでは、なぜこのような制度が用意されているのでしょうか。人にはいろいろな考え方があって、自分が稼いだお金は自分で自由に使いたい。収入が多いからといってたくさん税金を取られて、それで貧しい人の生活を支えるのは反対だ。自分であまり稼がない人が、それ相応の生活をするのは当然のことだ、という考え方もあります。「オバマ・ケア」問題に顕著に表れているように、アメリカではこのような傾向が強いように思いますが、それでもアメリカも含めて先進国といわれる国の多くは、人の暮らしを保障しようとします。わたしたちもそれが当然だと思っています。なぜでしょうか。

こうした制度の根底には、西欧近代が生み出した理念があります。「自由」で「平等」な「人間」、「人権」という理念です。たとえば、アメリカ「独立宣言」には次の一文があります。「すべての人間は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利を与えられている。その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれている。」1789年のフランスの人権宣言でも、第1条に「人間は自由で権利において平等なものとして生まれ、かつ生きつづける」とあります。第2条は、この権利を保全するのが国家の役割であると述べています<sup>9</sup>。このような理念に基づいて構築されているのが、近代の「国民国家」です。「国民」は、「自由」と「平等」といった理念、あるいは言語や伝統的文化のように同じものを共有する同質的な存在だとされています。国民国家は、国境で領域（領土）を画定し、国籍で成員、つまり国民を決定して、この枠の中で人々の安全と生活を守り、その幸福の実現を図るとされています。つまり、様々な束縛から解放されて自由になった同質的な「個人」と、領土の範囲内のことは自分たち国民で決定する「国民国家」、この2つが制度構築の大前提なのです。

ところが、こんにち、国民国家は揺らいでいます。経済・政治・文化・社会・メディアのグローバル化によって世界はますます互いに依存するようになり、均質化しつつあります。先進諸国はグローバル化の恩恵を享受していますが、その一方で、様々な問題に直面しています。グローバル化にともない国境の壁がずいぶん低くなり、人・モノ・情報をはじめとして多種多様なものが国境を

<sup>9</sup> 人権については、リン・ハント、2011、『人権を創造する』岩波書店を参照。

越えて出入りするようになりましたが、そのために、国民国家はかつてのようには機能できなくなっています。

たとえば、経済的合理性・効率性の徹底とグローバルな市場経済化は世界規模で競争を激化させ、様々な分野で標準化を進めています。どこでも同じルールと基準を採用せざるをえなくなっているのです。その結果、どの国でも歴史的諸条件に応じてそれまで独自の制度によって保障してきた労働と生活のための諸条件を維持することが難しくなりました。国家は社会生活の細部まで保護と管理の網の目を張りめぐらしてきたのですが、それができなくなりつつあります。多くの人々が生活を脅かされ不安を感じているにもかかわらず、うまく対処できないのです。EUや難民問題からも明らかのように、もはや一国家だけで考え決定できる時代ではありません。グローバル化という現象は、国民国家というシステムを揺るがし、その役割を変化させています。さらに、同質的な国民と領域性をもった国家を大前提に考える発想そのものの見直しを促しています。

このグローバル化にともなって派生する問題を、わたしたちの生活に密接に関わるどころから考えてみますと、市場経済化がグローバルな規模で進展して、経済的な利益をいかにして効率的にあげるかが最重要課題になったために、肝心要の暮らしが軽視されるようになりました。当たり前のことですが、わたしたちはみな幸せに生きていきたいと願っています。そのためには生活の安定と安心が必要です。その基本的な条件が就職して一定の収入を確保することです。真面目に仕事をしていれば、生活できるということです。結婚して子どもをもうけ、次の世代を育ててバトンタッチしていく。このサイクルは欠かせません。ところが、非正規雇用が増加し、雇用形態の4割を占めているように、こんにちでは人の暮らしが不安定になって、社会が存続していくためのサイクルさえ難しい状況になりつつあります。公的年金も怪しくなっていますから、退職後の生活が心配です<sup>10</sup>。雇用形態や社会保障、年金制度など、生活を守るための仕組みが今や存続の危機に瀕しているのです。

最近では、「社会的排除」とか「社会的包摂」という言葉を頻繁に耳にするようになりました。阿部彩さんによれば、「社会的排除」は単なる貧困状態ではありません。仕事を失って収入が得られなくなったり、生活が成り立たないほど低収入になることで、「労働市場から追い出され、社会の仕組みから脱落し、人間関係から遠ざかり、自尊心が失われ、徐々に社会から切り離されていくこと」をいいます。「社会的排除」という言葉が用いられているのは、社会の仕組みそのものが関係を失った状態に人を追い込んでいく、と考えられているからです。このような状況を前にして提示されたのが、「社会的包摂」です。わたしたちは、国家だけでなく、もっと小さな、様々な社会のなかで生きています。会社や学校、地域、町内会、家族などですが、このようないくつもの小さな社会のなかで存在を認められて、生きていけるのです。つまり、「これらの『小さな社会』は、人が他者とつながり、お互いの存在価値を認め、そこにいるのが当然であると認められた場所」なのです。このような「居場所」をもっていることが「包摂される」ということです<sup>11</sup>。人が人として生きていくためには「包摂されること」が重要だと強く認識されるようになったのです。

「社会的排除」と「社会的包摂」という考え方は、近代社会を生み出したフランスやイギリスなどで、第2次大戦後の復興と高度経済成長が終焉した頃に出てきました。たとえば、フランスは労

<sup>10</sup> NHK スペシャル取材班, 2013, 『老人漂流社会』主婦与生活社, NHK スペシャル取材班, 2015, 『老後破産: 長寿という悪夢』新潮社を参照。

<sup>11</sup> 阿部彩, 2011, 『弱者の居場所がない社会—貧困・格差と社会的包摂』講談社。このほかに岩田正美, 2008, 『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣を参照。

働力不足を補うために旧植民地からたくさんの人を労働力として受け入れたのですが、「栄光の 30 年」という経済的好況の時代が終わったとき、人々は仕事を失ってしまい、1980 年代から「移民」として問題視されるようになりました。こんにちではフランスが高失業率などの困難な状況にあるのは移民のせいだとして、移民の排除を主張する国民戦線のような政党が勢力を増しているのです。先日の大統領選挙でも第 2 回投票まで、代表のマリーヌ・ルペンが残りしました。

フランスの現状を示す例を 1 つ紹介しますと、2005 年に移民の「暴動」とされるできごとが起りました。20 日間で 9000 台もの車が、夜間に、移民の若者たちによって焼かれたとされています。非常事態を宣言した都市もありました。警察が「暴動」終息宣言をした時でも、1 晩で 200 台を超える車が燃やされています。それでも「終息」だということです。信じられないことです。移民の若者たちには、就職などの差別やフランス社会に受け入れられない疎外感があったとされています。しかし、これは移民の若者たちだけの問題ではありません。特に何も大きな事件のなかった 2012 年をみてみますと、1 年間になんと 4 万台もの車が焼かれているのです。大晦日だけで 1067 台です。平均すれば、1 日 110 台です。動機は「気晴らし」「意欲返し」など様々で、車を焼いたのは移民の若者に限りません。犯人の多くは男性で、無職か学校の生徒で、4 分の 1 が 17 歳以下の未成年です。『ル・モンド』紙はこの状態を「フランス固有のフォークロア」と表現しています。車を焼くことが常態化し、今や「伝統」になっているといえます<sup>12</sup>。フランス社会がいかに深刻な事態に直面しているのか、よくわかります。

ところで、国民国家の揺らぎと人々の不安はグローバル化だけが原因ではありません。問題の根底には西欧近代、とりわけ、わたしたちが生きている「後期近代」の特質に関わる問題があります。「後期近代」はまた、「超近代」とか「第 2 の近代」とか呼ばれていますが、よく耳にするのは、「ポストモダン」という表現ですね。ポストモダンは、いままで経験した世界が終わって新たな世界が始まったことを示す言葉です。ただ、これから先がどうなるかわかりませんので、「ポストモダン」＝「近代以後」といつているわけです。「後期近代」や「超近代」は、わたしたちが近代から抜け出したのではなくて、いままさに近代が徹底した段階にいることを示す概念です。

「後期近代」（「超近代」）の特徴について、フランスの宗教社会学者のジャン＝ポール・ヴィレームの説明<sup>13</sup>を見てみましょう。ヴィレームによれば、近代と「後期近代」との最も重要な違いは「確信の論理」から「不信の論理」へ移行したことです。何かを確信していた時代から何も信じられない時代になったということです。この移行には近代に本質的な原理である「個人化」（individualization）の徹底と「再帰性」（reflexivity）の拡大が関係しているといえます。

「個人化」はなんとなくわかるかもしれませんが、「再帰性」の方はなんのこともかわからないと思いますので、少しばかり説明します。たとえば、人の姿を見て、カッコいいとか、センスが悪いとか、いろいろ思います。おそらく何らかの感覚的な基準があってそれに照らしてこのような判断が出てくるのでしょう。この場合、他人のことですから気楽なものです。ぼろくそにいても、自分自身は痛くもかゆくもありません。ところが、鏡の前に立つと違います。目に飛び込んでくるのは自分の姿です。最初はあれこれ思っただけで楽しめるかもしれませんが、じっくり見ていると、だんだん気に入らないところばかりが目につくようになります。他人に向けていた美の基準を自分自身に向けたために、自信を失うこともあります。「再帰性」とは、他者に向けていた批判的なまなざしを自

<sup>12</sup> 加藤晴久、2014、「連載・『ル・モンド』紙から世界を読む」、『機』（藤原書店）、NO. 263、p. 20。

<sup>13</sup> ジャン＝ポール・ヴィレーム、2009、「超近代(ultramodernité)の文脈における宗教」、ジャン・ボベロ、門脇健編著『揺れ動く死と生』晃洋書房、参照。

分自身に向けるようになることから生まれる揺らぎです。

それでは、近代社会への「再帰性」の拡大とはどういう意味でしょうか。近代の特徴の1つはあらゆることばを徹底に批判検証することですが、「再帰性」とはそのまなざしを近代の理念自体に向けることです。近代を支えてきたのは、人間の「理性」や「合理性」、「自由」と「平等」、「進歩」といった理念です。これらは「血統」や「家柄」などを基本原理とする、近代以前の身分制社会とそれを支えてきた宗教とを厳しく批判するとき、絶大な効果を発揮しました。人間を解放する有力な武器となったのです。近代社会が誕生した後も、批判的まなざしは失われることなく、いっそう強くなっていきます。やがてそれは近代の理念や原理そのものに向けられるようになりました。その結果、近代の理念や原理は「絶対的なもの」ではなくなりました。このような過程を捉えて、「後期近代」は近代の終焉ではなく、近代がより徹底した時代だということです。

たとえば、人間の「理性」や「合理性」、科学の発展をはじめとする「進歩」にわたしたちはかつてほど魅力を感じているでしょうか。2度にわたる世界大戦、ナチスドイツによるホロコースト、旧ユーゴスラヴィアでの民族浄化、原爆の投下や原発事故の脅威など、悲惨な出来事を数多く経験した今日では、わたしたちは人間性そのものについて考え直さざるを得ません。たとえ福島第1原発のような災禍がなくても、原子力発電所は人間に危害を及ぼすことがなくなるのに数万年も要する使用済み核燃料を生み出します。それがわかっていながら世界全体で数多の原子力発電所を稼働させているのですから、人間はなんと愚かなのだろうか、と思わざるを得ません。人間性を信頼し、無限の可能性をみだかつての理念は「絶対的な真理」ではなくなったのです<sup>14</sup>。

この意味をよく理解するために、ヴィレームのいう「確信の論理」から「不信の論理」への移行についてもう少し詳しく見てみましょう。ヴィレームは次のようにいいます。

西欧近代は、経済、科学技術、政治、社会文化のあらゆる分野において進歩への強い信頼によって成り立っていた。人間の理性や合理的精神は科学を初めとして社会のあらゆる面において進歩を実現し、人々に幸せをもたらすと信じられていた。変化は進歩と結びついていた。力強い「確信」に満ちた時代である。ところが、「後期近代」では、人々は過去も未来も疑い、なんでも批判的に検討しようとする。ここには「進歩信仰」に支えられた「確信」はない。あるのは、すべてが確かさを失った「不信」であり、変化は不安と結びついている。このような近代の徹底化は、「個人化」と「再帰性」が社会に拡大することで示される。つまり、行過ぎた個人化の論理、個人を最優先して考える発想は、あらゆる集団的規範を問題視する。また、「再帰性」が組織的に行われて、あらゆる分野に対して批判的な検証が行われるようになると、近代が思い描いた理想社会を相対化するようになる。こうしてすべては確かなものではなくなっていく。

以上から、近代の特質として2つを挙げることができます。1つは、「個人」とその自由を何よりも尊重し、あらゆる集団から解放されて、すべてを個人の観点から捉え優先しようとする個人主義の傾向です。すなわち、「個人化」です。もう1つは、あらゆることを徹底した批判的検証の対象とする「批判精神」と「再帰性」です。「後期近代」では、この2つの傾向が徹底され、社会を貫徹していくのです。その結果はどうなるのでしょうか。

近代が生み出した最も重要な価値観は、「人権」という理念です。こんにちでは、人権を真正面から否定する人はありません。その人権の核というべきものはまさに「自由」ですから、「個人の自由」

<sup>14</sup> 「自由」「平等」「理性」「合理性」などの理念とその今日的意義については、ツヴェタン・トドロフ、2008、『啓蒙の精神』法政大学出版局を参照。ほかに、ロイ・ポーター、2004、『啓蒙主義』岩波書店も参考になる。

を追求し実現することは肯定されるはずで、実際、徹底的に追求されてきました。ところが、個人化の行き過ぎが生じたことで、新たな問題状況が生まれています。

政治哲学者のマルセル・ゴーシェは次のように述べています。「民主主義社会においては、我々の大半が、個人の権利は神聖不可侵で、個人の権利を集団的な力で覆すことはできないと考えている。」  
「個人の自由を犠牲にするいかなる正当性もはや存在しない」。ゴーシェは、このように個人主義化した社会では、集団的統治は次第に難しくなる、といます<sup>15</sup>。ところで、民主主義は、存続の前提条件として、本来、市民による、理性と意志にもとづいた積極的な政治参加を必要としています。ところが、行きすぎた個人化によって人々が集団的な枠組みへの関心を失えば、政治参加しなくなって、民主主義の基盤が根底から覆される危険性があります。政治哲学者のドミニク・シュナペールもまた、こんにちでは集団の優越性が後退して、社会的絆の解体が進んでいる、と危惧の念を表明しています。「個人の自由」があまりに徹底されると、人と人との社会的つながり、社会的連帯が危機に瀕するというのです<sup>16</sup>。

この徹底した個人化の問題をわたしたちの生活に眼を転じて考えてみましょう。先進国では、物質的な生活水準が高まり、社会保障など制度的な生活保障が発展したことによって、集団に頼らなくても、とりあえず人は生きていけるようになりました。さらにいえば、強固な集団的な枠組みや規範を嫌うようになりました。「わずらわしいもの」「疎ましいもの」「束縛」と感じるからです。自分で選択できる幅は、以前に比べるとずっと大きくなったように見えます。

ところが、今、問題になっているのは、社会の流動化が進むにつれて、生活を支えてくれるはずの諸制度が機能しにくくなっていることです。こうしたなかで、徹底した個人化は、社会的に発生する失業などの諸問題を集団や社会の問題としてではなく、個人の問題として受けとめ対処するよう促して、人を不安定な状況に置いています。「自己責任」という言葉はこうした事情をよく示しています。人は集団的なものに守られなくなって、社会的なリスクに直接さらされ、自分で何とかしなければならないと感じるようになっていくのです<sup>17</sup>。こういう状況は「剥き出しの個人」「裸の個人」という言葉で表現されています。衣服は身体を包み込んで保護してくれますが、今ではまるで裸になったようなもので、人を守るものが何もない、というのです。また、「再帰性」という、すべてを批判的に検証しようとする傾向は、近代における強い確信の源、変化を求めるエネルギーの源であった諸々の理念や価値、それに基づく国家の諸制度さえも徹底的に批判しました。その結果、近代の理念や価値は絶対性を失って、依拠すべき確かなものが何もない、不安な状態を生み出しました。今では、絶対的に信じることができるものなどありません。

以上をまとめますと、「後期近代」は人間を集団的・社会的制約から解放して、自由をもたらし、ある意味で選択肢を増大させました。しかし、その一方で、近代を支えてきた諸理念や諸価値、国家の諸制度を揺さぶり、個人を社会的な絆を欠いた不確かで不安定な状態においてしまいました。

抽象的な話が続いていますが、わたしたちの現状に目を移せば、このような状況の一端を確認することができます。たとえば、近年、地縁も血縁も社縁ももたない社会を意味する「無縁社会」という言葉が使われるようになりました。誰とも親しい関係をもたず、人と言葉を交わすことなく暮

<sup>15</sup> マルセル・ゴーシェ、2010、『民主主義と宗教』トランスビュー参照。

<sup>16</sup> 市民性の問題については、Peter Riesenberg, *Citizenship in the Western Tradition: from Plato to Rousseau*, University of North Carolina Press, 1992. とくに Introduction を参照。古代ギリシャのポリスにおける市民性と近代以降の市民性との違いが簡潔に説明されている。

<sup>17</sup> 宇野重規、2009、「社会科学において希望を語るとは 社会と個人の新たな結節点」、東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望学1 希望を語る 社会科学の新たな地平へ』東京大学出版会、273-276。

らし死んでいく人が増えているといいます。亡くなったことさえすぐにはわかりませんし、発見されても、遺体や遺品の引き取り手がないために、処理を専門に行うことがビジネスとして成り立つまでになっています。わたしが「無縁社会」という言葉を知ったのは、NHK で放送された「無縁社会—“無縁死” 3万2千人の衝撃」からです<sup>18</sup>。これをみたとき、本当にショックでした。

わたくしごとで恐縮ですが、わたしは島根県の山村の出身です。若いときには田舎の暮らしが息苦しく感じられて、なんとしても都会に出いと思いました。それで大阪の大学に進学しました。わたしにとって大阪での匿名性の高い生活は悪くありませんでした。ところが、母親がクモ膜下出血で倒れて、農作業どころではなくなりました。わたしは長男ですので、とても困ってしまいました。そのとき、集落の人たちが集まって、みんなで農作業をしてくれました。両親が亡くなったときも、集落の人たちは仕事を休んで、お通夜やお葬式、埋葬など一切をしてくれました。食事も全部用意してくれました。誰かが亡くなれば、その死を集落のみんなで悼み、見送るのが昔からの慣わしなんです。わたしの家族は戦時中の1943年に今のところに引っ越してきましたので、わたしが子どものときも、なんとなく他の子どもとは違った扱いを受けているような感じがしました。それがわたしの地域に対する微妙な感覚の一因になってきたのかもしれないかもしれませんが、両親が窮地に陥ったときや葬式の際の集落の人たちの振舞いや心遣いを見て、心の底から感謝の気持ちが湧き上がってきました。今でもはっきり覚えています、「この人たちが記憶してくれている限り両親は生きている」と強く感じたものです。両親の死は深い悲しみでしたけれども、集落の人たちの温かい心を感じて、人とともに生きることを意味を考えさせてもらいました。それに比べると、「孤立死」「無縁死」はあまりにも寂しい生であり死であるといわざるをえません。

無縁社会については、文芸春秋から『無縁社会—“無縁死” 3万2千人の衝撃』という本が〇〇年に出版されていますから、それをご覧ください。このほかに、石川結貴さんの『ルポ 子どもの無縁社会』（中央公論社、2011年）も参考になります。この本も衝撃的でした。親が無縁化することで子どもも「無縁の連鎖」に巻き込まれ、社会システムの恩恵を受けることさえできなくなって、いつのまにか社会から消えていくというのです。戸籍も住民票もなく、学校にさえ行けない子どもが増えているというのです。彼らがどういう運命をたどったのか、行政を含めて誰にもわかりません。本当に悲しいことです。

こうしたことを考えますと、確かに、わたしたちは「個人の自由」を追求し国家の諸制度や社会システムに支えられて、集団的な枠組みや規範からある程度自由になることができました。しかし、「孤独死」「孤立死」や「無縁社会」という言葉が象徴しているように、わたしたちは暮らしを支えてきた様々な絆やつながりまでも失って、「孤立」を深めているようです。

このような近代社会の抱える諸問題について、内山節さんのお考えを紹介しましょう。内山さんのご専門は西欧哲学ですが、1年の半分を東京で、もう半分を群馬県の上野村という山村で暮らしています。大変博識な方ですが、それでも山村での生活からつかみ取ったことがお考えのベースになっているように思われます。少し表現が難しくなりますが、とても重要ですので、これから内山さんの言葉に耳を傾けてみましょう。内山さんの近代世界に関する理解を要約すれば、次のようになります。

近代的世界は「人間の本质は個人にある」とし、「すべてが個人に始まり個人に終わる世界」であ

<sup>18</sup> NHK スペシャル「無縁社会～“無縁死” 3万2千人の衝撃～」、2010年1月31日（日）午後9時00分～9時58分放送、総合テレビ放送。

る。空間としては、資本主義的な市場経済・市民社会・国民国家という3つのシステムからなる普遍的世界である。換言すれば、人は自然や風土、歴史などと様々な関係を結んで生活しているが、「近代的個人」とは、このような関係をすべて捨て去って、人間を様々な関係から切り離された存在、同質的な個とみる見方である。「普遍的世界」もまた、独自の個性をもった様々な文明や文化が並存し関係し合っている世界を、均質化された平板なたった一つの空間とみなすものである。近代的世界を満たしているのは、自由・平等・友愛という普遍的な理念である。これは人間の理性と意志と主体性を絶対視して、そこからすべてを考えようとする人間中心主義的な理念である。

内山さんはこのような世界観・社会観には大きな問題があるとみています。というのは次のように考えるからです。現実には、人は自然や歴史、地域や協同といった具体的な諸関係のなかで複雑なつながりとともに生きてきた。人は自分だけで成り立っているのではなく、「他者」との様々な関係を身体に刻み込んだ存在である。「他者」とは、自分以外の人々という意味ではない。人間だけでなく自然・歴史・文化・社会など、自分と関係をもつすべてのものである。

内山さんはこのような諸関係の総体である小さな世界を「ローカルな世界」と呼んで、「安心と無事」という感覚をもたらす、人にとって欠かすことのできない生の基盤として重視しています。というのも、人は自然や風土とともに営みを続けることによってローカルな世界に特有の「精神の習慣」を身につけてきたからです。この意味で、決して同質的な存在ではないのです。また、この営みの連続性を生活のなかで実感できることは、自分を越えた時間と関係性を生きることであり、それが「安心と無事」という感覚を生んできたからです。だからこそ、何らかの記録や痕跡、生きたつながりを通して、この連続性が目にみえること、感じられることが重要なのです。人間には、過去が記憶として受け継がれ生きていく具体的な場が必要だと考えるからです。

以上から、内山さんの考える近代的世界の問題点を次のようにまとめることができます。近代的世界は「ローカルであること」を解体しながら普遍的世界をつくりだし、そこに人々をのみ込んできた。近代的個人という理念もまた、具体的な諸関係の中で生きる人間の世界を壊し、人間を普遍的な同質的な個に変えて、取替え可能な個人にしてしまった。自由・平等・友愛の理念はあまりに人間中心主義的である。その根底には、自然さえ支配できると考えるほど人間の知性を絶対視する人間観があり、それが、人間が長い時間のなかで自然との間に築いてきた豊かな関係を視野の外に追いやってしまった。こうして人々は、「ローカルな世界」において日々の暮らしを通して思想・価値観・振舞い方・考え方や感じ方を身につけてきたことも、それらを共有していることも実感できなくなって、自分の居心地のよさに関心を示さなくなった。要するに、普遍性と抽象的な個人とを理想とする近代の理念は、自然や過去などの様々な関係から人々を切り離し、それによって人々の視野を狭め、複雑な諸関係のなかで展開される生活の様々な側面と、それが人の生にとってもつ意味とを見えなくしてしまった。人々は様々なつながりを失って根なし草のように「漂流する個人」になったのである。したがって、重要なのは、普遍性にのみ価値を見出す「精神の習慣」から自らを解放し、諸関係を取り戻すことである。他者との関係的な世界を通して個人が形成され、その関係を通して自ずと他者とともに生きていくことができるような社会、自然を含めて労働や生活の様々な面で人々が結び合って、安心と無事のなかで暮らすことができる世界である<sup>19</sup>。

内山さんはこのような世界を「ローカルな世界」と呼び、「自分の存在の確かさが見つけられる場所」だといいます。わたしは、様々な関係やつながりから切り離された人間の不幸を近代社会の基

<sup>19</sup> 内山節，2005、『「里」という思想』新潮社。とくに「はじめに」を参照。

本的な原理との関係において捉え、「ローカルな世界」への着目を主張する内山さんの見解に説得力を感じています<sup>20</sup>。

ところで、わたしは、内山さんのいう「自分の存在の確かさが見つけられる場所」を松場登美さんの暮らしに見出すことができると思います。松場登美さんは群言堂という服飾ブランドを経営する服飾デザイナーです。松場さんは『群言堂の根のある暮らし—しあわせな田舎 石見銀山から—』(家の光協会, 2009年)という著書の冒頭で次のように語っています。

山の中腹から眼下を見下ろすと、緑深い山あいには赤茶色の瓦屋根がきらめく集落を一望することができます。四方を山に囲まれた、まるですり鉢の底のような小さな町。この場所に身をおくと、自分が今ここに生きていることをひしひしと感じ、気力が湧いてくるのです。ここがわたしの居場所。大丈夫、ここでならやっつけられる。(2頁)

わたしはこの文章がとても好きです。どうしてこんなことができるのかと思うのですが、松場さんは土地や地域、人や過去を「授かったもの」として受け容れています。それが様々なものとの良質な関係を生んでいるようです。松場さんは小さな町での暮らしを「根のある暮らし」と呼んでいます。「根」とはつながりのことです。つながりを日々感じ、それに支えられて生きる喜び、これこそが「自分の存在の確かさ」を感じて生きるということではないでしょうか。松場さんについては、第4章の「足元の宝を見つめて暮らしをデザインする」で詳しく説明することにします。

#### 4. 今何が求められているのか

近代的世界の問題点をもう少し考えてみます。わたしたちは、今、漠とした不安のなかで生きています。経済がどうなるかわからず、暮らしの先行きが見えません。人口減少とともに、農山村では空き家が急増しています。また、何百年にもわたって暮らしを支えてきた農地が放棄され、草木の生い茂る荒地と化しつつあります。これまでの生活の仕組みを維持することは難しくなりました。都市では、仕事をしていても生活ができない人々が増えています。それだけではありません。先ほども紹介した「孤独死」や「無縁社会」という言葉を目にするようになりました。人と人との絆が弱まって、深刻な事態を迎えていると思われまます。

不安の源は複雑でとらえがたく、単一の原因に帰すことはできませんが、西欧近代に始まるわたしたちの時代、わたしたちの社会が行き詰まりを迎えているといえるのではないのでしょうか。あるいは、社会の深いところで地殻変動が起きているというべきかもしれません。「個人」「自由」「平等」「普遍性」「合理性」「市民」「国民国家」、これらはすべて近代社会の土台ともいえるべき理念であり、人々の認識の枠組みを形づくってきましたが、もはやかつての輝きはありません。人間の生のあり方、人間と自然との関係、人と人との結びつき、人と国家との関係が、今、根源的に問い直されているのです。

このような観点から今日の社会が直面している根本的な問題とは何か、人々は今何を求めているのか、を考えてみましょう。いろいろな文献を読んでいますと、多くの人に共通する問題意識があるようです。たとえば、「分断」「切断」「回復」「とりもどす」という意味の言葉がとても目につきます。わたしたちは様々な関係やつながりから切り離されてしまった。わたしたちの生活には重要

<sup>20</sup> 西岡常一, 1993, 『木のいのち木のこころ (天)』草思社をお薦めしたい。表現はまったく異なるが、内山さんの見解と通じ合うものがある。語られているのは、法隆寺の宮大工であった西岡氏が古代建築などの修理・再建に関わって「手の記憶」としてつかみとった自然観、人間観である。

な何かが足りない、という危機感があって、それが失ってしまったものの「回復」や「とりもどす」という言葉となって現れているようです。

関係やつながりとして真っ先に思い浮かぶのは、人と人との関係や結びつきですが、それだけではありません。人と自然との関係、土地との関係、過去や死者、死の世界との関係、未来との関係など、人を取り巻くすべての関係とつながりが重要なのです。

わたしたちは「後期近代」という時代に生きていますが、近代が理想とし制度構築の前提としてきたのは「個人」という人間の捉え方です。「個人」は生身の人間ではありません。様々な具体的な関係を削ぎ落とした同質的な存在です。日常の具体的な諸関係からある程度距離をとって「客観的に」考え、自分の判断で決定し行動する人間、自分の行為の責任を取る人間です。換言すれば、公の事柄、公共性をきちんと認識し尊重する「市民」ということです。「国民」とはこのような市民の集合体であり、原理的には物事を最終的に決定する権利、あらゆる権威の源泉である主権をもつとされています。近代はこのような人間像を大前提にして国民国家と民主主義社会を創ろうとしてきたのです。そしてこのような個人を創る役割を担ったのが、学校です。

近代社会は「人間の尊厳」や「自由と平等」という理想を示して、豊かな生を描き出しました。わたしたちはその恩恵に与っていますし、理想のかなりの部分はわたしたちの目標であり続けています。しかしながら、問題もあります。わたしたちは自分の身体や足元の暮らしの場から目を逸らして、まなざしを遠くに向けるようになりました。目指すべき対象、考えるべき対象は遠くにあると思うようになりました。ものごとを抽象的に考えるようにもなりました。何かを議論しようとするれば、自分のことはさておいて「一般的に」考え語ろうとしますし、無意識のうちに国家の枠組みを前提に発想しています。しかし、そうすることで自分を取り巻く世界をはっきりと理解できるようになったのでしょうか。むしろ逆ではないのでしょうか。決して見ることも理解することもできない大きなものに翻弄されていると感じることが多いのではないのでしょうか。あるいは、すべてが他人事にしか感じられないつまらなさや虚しさから自分のうちに閉じこもって自分のことしか考えなくなりがちではないのでしょうか。いずれせよ物質生活が大変し、国家の諸制度や様々なシステムも整ったことで、自分の身体をあまり使わなくても人と関わらなくても生きていくことができる社会になりました。生活のなかで様々な関係やつながりを感じることもそれらの必要性を感じることも難しくなっています。

「回復」とか「とりもどす」という言葉は、様々な問題を指摘するときに出てきますが、そうした認識の根底には次のような欲求があるように思います。まずは、まなざしを身近なところに向けて、自分がどのような関係とつながりのなかで生きているのかをじっくり見つめて、自分の「世界」を感じとりたい。生きていると実感できる場にしたい。そんな感覚と身近さを取り戻したい、という欲求です。こうしたことを考慮すれば、今求められているのは、近代が理想としたように徹底して個人として生きることで、国家に代表される巨大な存在に守られて生きることでないと思われれます。もちろん、どちらも重要ですが、個人と国家の中間にあつて、もっと身近なところでわたしたちを支えてくれるものもまた必要なのです。というのは、人はみな、なんらかの具体的な「つながり」、「支え、支えられる関係」を必要とし、そのための「場」なくしては生きられない、と思われるからです。

すでに述べたように、「つながり」というとき、それは人と人とのつながりに限りません。重要なのは、現在を生きる人と人との「絆」だけではないのです。たとえば、過去とのつながりについて、内山さんは、長期にわたって繰り返されてきた人間の営みは、景観や土地、建物などに刻印され無

言の記憶となっている。過去はそのような形で現在に生きていて、人に過去との確かなつながりを感じさせる、といいます。わたしは内山さんの本でこの言葉を読んだとき、「なるほど」と思いました。古いものに接したとき、なぜかほっとして安心しますが、その理由がうまく説明されているからです。過去だけではなく未来をも含めてと思いますが、わたしたちには、自分の生を超える永続的な何かとつながっているという実感が必要なのでしょう。

最近、深く考えさせられた言葉を紹介しましょう。口永良部島の人の言葉です。ご存知のように、2015年に口永良部島では火山が噴火して島民全員が屋久島に避難しました。皆さん、住宅を借りて生活されたのですが、ちょうど避難生活になってひと月たった頃だったと思います。テレビのニュースを見ていると、避難された男性が次のようなことをおっしゃっていました。「避難暮らしをはじめ、自分がいかに島の自然や土地、そこで暮らす人との深いつながりのなかで生きてきたのがよくわかった。そうしたものから切り離されていると、自分の存在が薄れていくような気がする、生きているという感じがしなくなる、早く戻りたい」と。「地域」という発想の根底にあるのは、このような関係やつながりを取り戻したいという無意識的な願望ではないでしょうか。この根源的な願望に地域学は応えなければならない、そこから地域学を構想したい、とわたしは考えています。

### Ⅲ. 地域から立ち上がる様々な動き

話が難しくなってしまうので、ここからは具体的な事例を紹介しながら、地域について考えることにします。『地域学入門』の話しに戻って恐縮ですが、この本は地域学部教員の数年にわたる議論と各自の長年の研究蓄積の成果です。しかしながら、それだけでは本にはならなかったとわたしは思っています。いうまでもないことですが、何かを語るには、語り手の胸のなかに確信が必要です。地域学の場合、教員の多くは自分の専門分野を出て語ることになります。それぞれが研鑽を積んできた学術的な知だけでは本を出版するほどの強い確信を得ることはできなかったでしょう。この意味で、地域学総説でお話していただいた学外講師の方々の力はとても大きかったのです。彼らの取り組みからわたしたちは実に多くを学び吸収することができました<sup>21</sup>。そこで地域学部の構想する地域学を提示する前に、学外講師の方々の取り組みをいくつか紹介して、そこから何を吸収したのか、お話しすることにします。

#### 1. 結城登美雄さん「その土地を生きた人びとの声に耳を傾ける地元学」

最初に結城登美雄さんのお話です。結城さんは、民俗研究家で、執筆活動や講演活動のほかに「地元学」を主張し、「鳴子の米プロジェクト」など「地元学」を实践されている方です。わたしは「地域学総説」で初めて結城さんの講演を聴いたのですが、その圧倒的な迫力と説得力に驚嘆しました。いったいどこからあのような力強さが出てくるのか不思議に思いました。聞けば、東北や全国各地の村を訪ね歩いて、自分の目で確かめ、数え切れないほど多くの人々から話を聴いてこられたそうです。結城さんは、自分の話は地元の人々の「受け売り」だとおっしゃるのですが、巧みな話術もさることながら、確かに結城さんの言葉のもつ力強さは、多くの人々との語らいから得られたようです。結城さんの口について出てくるのは、過疎化し高齢化しつつある村の暮らしの細部です。そうした話から、「確かなもの」をもった人々の生き方と隠れた力が伝わってきます。

<sup>21</sup> 教員は地域学総説を受講した学生たちからも多くを学び地域学に組み込んだ。「地域学を創る」のは教員と実践者と学生の共同作業なのである。これについては、仲野誠、2011、「教室からの気づき—鳥取大学地域学部の授業をとおして」、『地域学入門』327-328 参照。

結城さんの著作のひとつに『地元学からの出発—この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける—』（農山漁村文化協会，2009年）があります。この本のなかで、結城さんは「地元学」について次のように語っています。

遠くで光り輝くものも悪くはないが、今はむしろ、ここにあるものをあらためていねいに見つめなおしたい。（中略）いたずらに格差を嘆き、都市とくらべて「ないものねだり」の愚痴をこぼすより、この土地を楽しく生きるための「あるもの探し」。それを私はひそかに「地元学」と呼んでいるのだが、要はこれからの家族の生き方、暮らし方、そして地域のありようを、この土地を生きてきた人びとから学びたいのである。性急に経済による解決を求める人間には、ここには何もないと見えてしまうだろうが、自然とともにわが地域を楽しく暮らそうとする地元の人びとの目には、資源は限りなく豊かに広がっているはずである。むしろ「地元学」は都市やグローバリズムへの否定の学ではない。自然とともに生きるローカルな暮らしの肯定の学でありたい。もう一度この土地を生きてきた人びとの声に耳を傾け、その発見のなかから自分もまた地域を再生するひとりの当事者として力を合流させたいと思う。（2頁）

結城さんの「地元学」は次の文章にも集約的に表現されています。

経済を絶対の基準としてきた私たちの社会が揺らいでいる。大きいを良しとしてきた価値観が問われている。人は土地を離れて生きていくことはできない。地域とは家族の集まりである。もう一度、同じ地域を生きる人びとと関係を再構築するために、それぞれの地元で隠れている人や資源や知恵や哲学を学び直すこと。そして自分の暮らす場所の未来を他者にゆだねないこと。さらに、自分もまたここを良くしていく一人の当事者になること。その力を合流させ、自分たちと次世代が生きやすい場所に整え直すこと。それが私の地元学である<sup>22</sup>。

以上の2つの文章から「地元学」の精神と視点を読み取ることができます。結城さんがおっしゃりたいのは、こういうことだと思います。これまでもっぱら経済というたった一つの基準から発想してきた。数の論理だけでものごとを捉えようとしてきた。それがいかに人々の眼を見えなくしてきたことか、貴重なものを棄てさせてきたことか。厳しい状況のなかでも楽しく暮らそうとしてきた人々の知恵と工夫をみてみよう。そうすれば、金銭によって得られる豊かさとは異なる豊かさが見えてくる。そこから、力を合わせて自分たちで生活を創っていこう。それを次の世代に伝えよう、と。

このような思いに支えられた「地元学」は、当然のことながら、「理念や抽象の学」ではありません。結城さんはいいます。「地元学は地元の暮らしに寄り添う具体の学」である。主役は、行政ではなく、住民である。すなわち、人と人との関係に配慮して生活する人々である。それゆえ、「地元学」は「その土地を生きた人びとの声に耳を傾け」、「これからの家族の生き方、暮らし方、そして地域のありよう」を学ぶものである<sup>23</sup>。つまり、自分の外部にある、本当には納得していない価値観、都市の基準、経済合理性というものさしなどに対して一定の距離をとり、自然とともにある日常の

<sup>22</sup> 結城登美雄，2006，「地元学をめぐる」、『季刊東北学』第6号，71。

<sup>23</sup> 結城登美雄（民俗研究家，地元学）「地域で支え合う食と農—暮らしの基本を考える」（2009年5月27日講演）。ほかに、「地域とは何か?」『地域学入門』28参照。

なかにあるもの、暮らしの中で積み上げられてきたものをベースにして、自分たちの足元から考え、実践につないでいこう、というのです。

結城さんは著書の中で自らの足で集めた数多くの事例を紹介されていますが、そこで提示された解釈は、長い時間のなかで続けられてきた人々の営み、日常の暮らしの細部を丁寧に見つめるよう促します。些細なことにみえても、そこに「確かなもの」を見出すことができます。わたしは、「地元学」の精神は地域学の精神と大いに響き合うと考えています。

## 2. 吉本哲郎さん「生きる力をとりもどす」

次に、同じく地元学の吉本哲郎さんのお考えを紹介します。吉本さんは水俣病に苦しんだ水俣市の市役所職員だった人で、結城さんとともに「地元学」を代表する方です。吉本さんには「地元学—足元をみつめてつながりを取り戻す—」というタイトルで講演をしていただきました<sup>24</sup>が、結城さん同様に、説得力のあるお話で、インパクトのある言葉がたくさんありました。たとえば、水俣病患者の杉本栄子さんの「人様は変えられないから自分が変わる」という言葉を受けて、「世間は変えられないから、水俣が変わる」とか、「あきらめろ、覚悟せよ、本物をつくれ」です。なぜ吉本さんはこのようなことをいわれたのでしょうか。わたしは次のように理解しました。

なぜ水俣が変わらなければならないのか。それは水俣そのものに問題があるからだ。有機水銀によって環境が汚染され、人命が失われ、大きな健康被害を出した。汚染源と汚染物質を除去し、環境を再生しなければならない。水俣病をめぐって人と人との関係も破壊された。「もやい直し」をして、人と人の結びつきを取り戻さなければならない。それだけではない。水俣はいわば「国の縮図」である。水俣はチツンに代表されるように近代化・工業化・経済発展によって豊かな生活を実現しようとしてきた。しかし、その結果、環境のほかにも大事なものを失った。この事実を受け容れ、失ったものを取り戻さなければならない。覚悟を決めて本物をつくらなければならない、ということなのです。

それでは、失ったものとは何でしょうか。失ったものを取り戻すには、どうしたらいいのでしょうか。本物とは何でしょうか。吉本さんにとって問題は、生活を巨大なシステムに委ねてしまったことです。ここから、生活を見直さなければならない、自分たちの生活を人任せにせず、自分たちでつくっていかなければならない、という認識が出てきます。

吉本さんには『地元学をはじめよう』（岩波書店、2008年）という、中学生以上向けに書かれた著作があります。その中で、松本里美さんという若い女性の言葉を引用して、失ったものが何か、説明されています。いい文章ですので、少し長いですが、紹介します。

近代化のなかで、おたがい顔の見えない関係の中でのやサービスや情報とお金やりとりされるようになり、暮らしは豊かで便利になった反面、人々が失ってきたものがある。それは一言で言えば「生きる力」だと思う。「生きる力」は、人間が生きていくうえで欠かすことのできない水と食べ物を確保し、道具や家など必要なものをつくり、支えあって生きていく人間関係を築いていくことだと思う。それは、自然や人と人との様々な関係を紡ぎだし、自分の頭や身体を使って知恵や技を磨き、それを受け継いでいくことでもある。

<sup>24</sup> 吉本哲郎（地元学ネットワーク主宰）「地元学—足元をみつめてつながりを取り戻す—」（2011年7月6日講演）。ほかに、吉本哲郎「地元学、地域の資産を再発見する」、*CEL, Jun, 2005, 17-20*を参照。

自分たちの生きる基盤を他人まかせにすることは、自身の「生きる力」を失っていくことであり、様々な（決定や物をつくる）過程がわかりにくいものになっていくことでもある。そのことによって、「安全」や「安心」、ひいては自らの生きがい何なのかもわからなくなり、精神や身体の健康にも様々な影響が及んでくる。（中略）

豊かさと深い関係のある生産のもつ強さを考え、……これから私は、味がある、健康である、楽しむことを大切にしたい生産に関わっていく。自分につながる自然や人との関係を大切にすることから、自分も大切にしたい「地についた生き方」をしていきたい。（204-205頁）

もちろん誰もが生産に関わる生き方をできるわけではありませんが、わたしは松本さんの文章に深く納得しました。

吉本さんは、「つくる暮らしへの回帰」を主張されています。何もつくりず、買う暮らしでは、お金が豊かさの唯一のモノサシになってしまう。「つくることの省略」によって、人とモノとの距離、人と自然との距離が遠くなってしまいます。いい町の条件は、自然と生産と暮らしがつながっていて、つねに新しいものをつくる力のある地域である。「つくる力」の衰退は「考える力」の衰退であり、「調べる力」の衰退である。

それで、吉本さんの地元学は、「自分たちで、調べ、考え、つくる」ことから出発します。その第1歩が「足元にあるものを調べる」こと、すなわち「あるもの探し」です。なかでも、川のような水の流れと人の暮らしとの関係を調べた「水の経路図」が象徴しているように、暮らしの根本に関わる場所から「あるもの探し」をしていきます。このプロセスにおいて、人は地域の歴史と向き合うこととなります。暮らしの成り立ちを調べるわけですから、当然、そうなります。こうして、地域のもっている力、人のもっている力を確認していきます。さらに、地元学に関わるなかで、人はあるがままの自分をそのままあるものとして見ていき、自分のもっている力に気づいていくといえます。つまり、自分がどういうところにいるのかがわかるので、自分が見えてくる。やることも見えてくるから、自信がついてくる。それはここで生きていく勇気と希望をつくることになる、と吉本さんはいいます。

以上から、吉本地元学のエッセンスは次の3点だとわたしは思いました。ひとつは、システムに依存した生活をするなかで自分と自然やモノや人との間に大きな隔たりができてしまった。この隔たりを埋めるべく努力しなければならない。2つ目は、足元を見つめ、あるもの探しをすることで、自分自身が様々なつながりや関係のなかにあることに気づく。つまり、自分を客観視できるようになる。最後に、こうして人は生きていく勇気と希望をもつことができる、ということです。要するに、吉本さんは、自分の足元を見つめて、様々な関係に気づき、取り戻そう。そうすることで、生きる力を取り戻すことができるということです。これはまさしく地域学の核になる考え方です。

### 3. 森まゆみさん「歴史が降り積もっているところで暮らすことは、生を豊かにしてくれる」

3人目は東京在住の作家、森まゆみさんです。森さんからは都会の暮らしについて学びました。森さんは、年4回発行の地域雑誌『谷根千』を発刊してきた人です。少数の母親たちが集まって「自分の町」、つまり、東京の谷中・根津・千駄木ですが、その町の生活や歴史、文化遺産や生活文化を聞き取りなどによって調べて記録し、住民に伝えたのです。歴史といっても、遠く離れたところで展開される歴史ではなくて、住民の日常の体験や記憶、暮らしが刻まれた土地や建物、路地の様子

や由来です。いわば「暮らしの歴史」です。町の現在を豊かな過去の記憶とともに表現したのです。

講演では、森さんが関わってこられた古い建物の保存運動と聞き取り調査による過去の掘り起こしが中心的な話題でした。なぜ古い建物を保存しようとしたのでしょうか。森さんは、過去を伝えるものは自分自身が歴史のなかにある存在だと感じさせてくれるからだといいます。歴史のなかで生きていることがわかる場が重要だ、と考えているのです。

聞き取り調査では、公式には語られることのない生活の歴史を掘り起こそうとしています。聞き取りを通して一人ひとりの生を目にみえる形にし、みんなで共有することで、地域に生きる人の生が厚く豊かなものとなっていくからです。また、この作業を通して、暮らしの場である地域を自分のものにすることができますし、そこからナショナルな歴史との接続が生じることもあるようです。

森さんの著作である『〈谷根千〉の冒険』（筑摩書房、2002年）も参考にしながら、地域と歴史と人の生との関係をもう少し掘り下げてみましょう。最初に確認すべきは、地域雑誌『谷根千』が対象にした谷中・根津・千駄木という「町」は、行政単位ではないということです。暮らしの実感から「自分たちの町」だと感じる生活圏です。住民にとっての、いわば「生きられた地域」です。この町は、谷中墓地を中心に、江戸開府以来のお寺や古い建物などが多く、多数の文人や貴重な手仕事の職人が暮らしてきたところで、普通の人たちの暮らしの記憶、生活文化や知恵が比較的良好に残っているところだそうです。

森さんは、様々な人々の人生や思い出がしみついた建物や風景をみると、長い暮らしの連続性と、土地や人との関わりのなかで自分が「生かされている」と感じる、この原風景が「心の落ち着き」と「癒し」を与えてくれる、といいます。そして、「歴史が降り積もっているところで暮らすことは、生を豊かにしてくれる」といわれました。これは、思わずはっとするような、素晴らしい表現です。

しかしながら、町も人の暮らしも、時とともに緩やかに、あるいは急激に変っていきます。何もなければ、歴史をつくりあげてきた人々の人生や暮らしの細部はいつのまにかわからなくなってしまいます。記録されないものは記憶されませんから、誰かが聞き書きし、記録していかないと、「なかったこと」になってしまいます。

この意味で地域雑誌『谷根千』の果たしてきた役割は、少なくとも3つあると思われます。ひとつは、住民の暮らしと生、「普通の人の生き死に」とその積み重なりを、住民自身の語る言葉を通して見えるようにし記録することで、町の生きた記憶として伝えたこと。2つ目は、『谷根千』自らが、地域の人々が互いの経験や思いを知り、町で起きている問題を語り合うことのできる広場、水平のコミュニケーションの場になったこと。3つ目が、住民が今あるもの、歴史的・文化的遺産を見つめ、自覚し、それを活かして、生き生きした町をつくることを可能にする「媒介者」になったことです。

『谷根千』の活動からいえるのは、町の暮らしをつくってきたものや暮らしの細部を知ること、さらに多様な人々と関わることを通して、人と人、人と過去の人々、人と土地とのつながりを感じ自分のものにすることができるということです。こうして、人の生が広がり厚みをもった「確かなもの」になるということです。また、多様な人々の暮らしと土地の記憶をひとつひとつ丁寧に掘り起こすことで、様々なつながりを目に見えるようにするとともに、新たなつながりをつくることにもなりました。こうした多様なつながりの存在がこの町の強さであり、それが大震災への迅速な対応にも現れているようです<sup>25</sup>。

<sup>25</sup> 森まゆみ「小さな雑誌でまちづくりー谷根千の冒険」（2010年7月14日講演）、「まちの暮らしに生きる歴史

わたしは歴史研究者ということもあって、鳥取大学の地域学を構想しながら、わたしたちの取り組みに歴史的視点が欠けていることをとても残念に思っていました。結城さんと吉本さん、そして森さんのお仕事と言葉は、歴史が人の生にとってもつ意味を見事に表現していると思います。

#### 4. 河合節二さん「震災からのまちづくり」

今度は、神戸市長田区野田北ネットの河合節二さんの活動を紹介します。河合さんのお話を初めて聞いたのは、鳥取市主催の「市民フォーラム」でした。太い地声もそうですが、何よりその内容に圧倒されました。それでフォーラムが終わるとすぐに「地域学総説」でお話していただくよう、河合さんにお願ひしました。学生に聴いてもらいたいと思ったからですが、そう判断したのは阪神淡路大震災という出来事の深刻さにもかかわらず、気持ちが和らぐような心地よさを感じたからです。

野田北は阪神淡路大震災で壊滅的な打撃を受けました。そのためまちづくりを文字通り一から、否、マイナスからやり直すことになりました。建物等の再建というハード面の課題からそのあとの住民同士の絆の再生というソフト面まで、課題は山積していました。河合さんはハード面の仕事を終えたとき、まちづくりがあまりにも大変で、一度はもうだめだと諦めたといいます。それを「わたしは一度死にました」と表現されました。それほど過酷な体験だったということですが、それでも何とかもちこたえることができたのはなぜでしょうか。そのエネルギーはどこからきているのでしょうか。

それを考えるヒントが河合さんの次の言葉の中にもありました。「生活環境を少しでも改善したい。」「この地区をいつまでも住み続けられるふるさとにしていきたい。そういう思いが住民のなかにはありました。」最初の言葉は震災前からの住民の思い、もうひとつは震災後のものです。どちらもとりよによって平凡な言葉ですが、野田北の皆さんの志が感じられます。こうした住民の思いがぎりぎりのところで支えとなったようです。

ただそうはいっても、何もしないで踏ん張れるものではありません。河合さんが紹介されたのは、情報を共有して相互理解をはかることです。その具体的な現れのひとつが「野田北ふるさとネット」（2002年～）です。「これは地域内の様々な団体や人々をネットワークで結ぶ役割を担っており、各団体がゆるやかな連携を取りながら、毎月1回定例会を開いて情報交換や企画運営の調整などを行っているそうです。ここで注目したいのは、「ゆるやかな連携」と「誰でも参加できること」です。強固な連携にしまうと、様々な団体やメンバーの間に力関係というか、中心というか、そのようなものができて、命令系統や義務感のようなものが生まれてしまいます。こうなると、メンバーは重苦しさや辛さを感じて、次第に参加しなくなってしまいます。また、「誰でも参加できること」、つまり、「開かれている」ということは、一部の人間だけで決定してしまわないために、さらにはそういう印象を住民に与えないためにも、重要でしょう。

もうひとつは、毎月1回の地域情報誌『わがまち野田北かわらばん』の発行（2001年～）です。一部の住民だけでなく、すべての住民に情報を伝えるために、この地域情報誌を全戸配付しているといいます。情報を一部の人間が独り占めせず、情報をすべての住民に伝えることで共有をはかるというのです。この「かわらばん」はなかなか面白いのです。自治会の行事や情報だけでなく、住民

---

をみつめて—『谷根千』の実践から—（2011年6月29日講演）。ほかに「地域雑誌『谷根千』の冒険—まちづくり四半世紀の経験から—『地域学入門』101-102参照。

の個人的な経験や思い、町の歴史など、軽いタッチで描かれています。読んでいて、思わず笑ってしまうところが随所にあります。さすがに関西人という感じです。

表現の仕方、肩肘張らずに、なんでもいえそうな雰囲気です。情報の共有に加えて、この雰囲気も重要でしょう。何でも言い合えるのは、素晴らしいことではないでしょうか。驚いたことに、野田北の「美しいまち宣言」(2004年)には「なんでも一緒にやれる、なんでも言い合える」というスローガンが掲げてあります。しかもこの宣言の文章は日常の言葉で書かれています。よそいきの表現ではありません。ビデオをみせてもらいましたが、住民は集まりでよく発言していました。あんなことをいって大丈夫だろうかと思えるようなことも平気です。何でも言い合えるというのは、地域にとって何物にもかえがたい貴重な財産ではないでしょうか。もちろん、スローガンに掲げているということは、裏を返せば、それも努力の賜物だということです。それはともかく、何でもいえることで、自分の存在が認められていると感じるでしょうし、多くの人々が知恵を働かせて、それを集めて生活をよくしていくことにつながっていく、と思われま

す。「野田北ネット」(2002年)、『わがまち野田北かわらばん』(2001年)、「美しいまち宣言」(2004年)を通していえることは、住民間で情報と理解を共有して、できるかぎりしっかりした合意を形成しようとしていることです。この意欲と態度が決定したことを実現するために必要でしょうし、さらには、「いつまでも住み続けられるふるさとにしたい」という切なる願いを実現するために欠かすことができない前提条件でしょう。それにしても、野田北の住民はどうしてこのような意欲と態度をもつことができたのでしょうか。河合さんによれば、「合意形成に王道なし。地道にやるしかない」とのことです。わたしが想像するに、おそらく震災(1995年)からのハード面でのまちづくりで苦労を重ねるなかで住民がたどり着いた認識であり、そこから生まれた工夫だと思われま

す。情報と知恵を集めるという意味では、行政や専門家の役割も欠かせません。もちろん、まちづくりは住民の意思だけで完結する問題ではありません。とくにハード面から作り直す場合、国・県・市など行政との協議がきわめて重要になります。この点に関して、河合さんのお話は実に興味深いものでした。市の担当職員は一定の期間が過ぎれば他の部署に移ってしまいます。せっかく意思を通い合わせることができるようになっても、担当者が代われればまた最初から関係を作り直さなければなりません。なんと面倒なことだ。普通はこう考えてしまいます。ところが、野田北のみなさんは違いました。市の職員も住民の話し合いに熱心に参加されていたそうで、住民との間に「友達感覚」ができたといいます。そのおかげで、職員も本当のことをいってくれたし、部署がかわっても連絡を取り続け、関係がなくなることはなかったといいます。むしろ、話の分かる人のいる部署がどんどん増えて、情報が入ってきやすくなったそうです。本気で話し合えるということは素晴らしい結果をもたらしてくれるようです。

河合さんは講演の最後を次の言葉で締めくくられました。「震災で自分が瓦礫に埋まってしまったとき、いつ助けてもらえるか、考えてみてください。最初に助けてもらえるのは人から好かれている人です。とことん嫌われている人でも、最後に助けてもらえます。しかし、助けてもらえない人がいます。それは空気のような人、存在が薄い人です。自分の存在が空気のようにならないようにしましょう。」

河合さんのお話を少し詳しく紹介したのは、地域をどのようにして創っていくかを考えるとき、重要なヒントがいくつもあると思ったからです。それが何なのかは繰り返しませんが、野田北には地域が発展していくための前提条件が備わっているようです。少し付け加えれば、野田北では、自

分の生活と地域を良くしていくことが重なっています。「自分のため」と「地域のため」がつながっているからこそ、エネルギーが湧いてきたのではないのでしょうか。逆に言えば、情報を共有しない、発言もできない、あるいはそれを許さないような雰囲気当たり前のところでは、野田北のような好循環は生まれないでしょう<sup>26</sup>。

#### IV. 松場登美さんの暮らしに学ぶ

実例の最後に、松場登美さんの暮らしと活動を詳しく紹介します。というのは、個人的ではありませんが、松場さんの講演がわたしにとって地域と地域学を考える上で大きな転機になったからです。地域学総説では、毎年、学外講師の方に来ていただくのですが、お話から学んで、それを地域学に組み込むという大きな目的がありますので、どなたに来ていただくかはとても重要な問題です。わたしたちがどうやって選んできたかといいますと、基本的に、その人の講演を聴いたことがあるか、著書がある場合は、それを読んで、地域学にとって必ず参考になるという確信があるときをお願いします。実際、来ていただいた方は素晴らしい講演をされて、学生も教員も知的に興奮します。

ところが、松場さんの場合は違います。わたしが推薦したのですが、松場さんのお話を聴いたことも本を読んだこともありませんでした。もちろん面識はありません。それでもわたしには強い確信がありました。というのは次のような事情があったからです。

松場さんは島根県大田市大森町という田舎の町に住んでおられるのですが、今では、世界遺産となり、石見銀山として知られています。私の実家はその大森町から10キロほど山奥に入ったところにあります。大森町には小学校の頃から遠足で行きましたし、普段の生活でも行きましたので、わたしのよく知る町です。わたしの記憶にある大森町は、戦国時代以来の歴史があるとはいえ、とても寂れた町でした。

結婚して帰省したとき、どこにも行くところがないので、史跡ということで妻を大森町に連れて行きました。すると、驚いたことに、町の空気がなんとなく変わっていました。古い民家に手を入れた「ブラハウス」というお店ができていて、そこを中心にとっても感じがいいんですね。そのときは「へえっ」と思っただけでしたが、その後、年々、町は心地よさを増していきました。あるとき朝日新聞を読んでいたら、松場登美さんのことが紹介されていました。お店の名前は「ブラハウス」から「群言堂」に変わっていましたが、松場さんご夫妻が中心のひとつになって、町の雰囲気が変わったというようなことが書いてありました。お2人のお考えも丁寧に紹介されていました。わたしは合点し、感銘を受けました。それで地域学総説で学外講師のお話になったとき、真っ先に浮んできたのが松場さんだったのです。

地域学総説での講演も衝撃的でした。同じ大森町を見ているにもかかわらず、見え方がわたしとはまるで違ったのです。わたしは田舎が嫌で都会に出ました。大森町を見ても寂しさを感じました。ところが、松場さんは、大森町を自分の居場所として、大森町での暮らしから大きなエネルギーと心の充実を得ているようなのです。実際、松場さんの講演が終わった後、暖かい希望のようなものがわたしの中に芽生えていることに気がつきました。それはわたしだけのことではありませんでした。わたしは考え込んでしまいました。それ以来です。かつての実家での暮らしを思い起こし、自分自身の心に素直に向き合いながら、地域について考えるようになったのは。そうすると、不思議

<sup>26</sup> 河合節二（野田北ふるさとネット事務局長）「震災からのまちづくり」（2008年5月14日講演）。ほかに「阪神・淡路大地震から得たもの—神戸市長田区野田北部地区」『地域学入門』126参照。

なことに、忘れていた記憶が鮮やかに蘇ってきました。自分で抑え込んでいたのかもしれませんが、こうした記憶はわたしにとって地域学を考えるとときの大きな財産になっています。

松場さんは、その後『群言堂の根のある暮らし—しあわせな田舎 石見銀山から』を2009年に出版されました。同じころ、森まゆみさんも『起業は山間から—石見銀山 群言堂 松場登美』(バジリコ, 2009年)を出版されました。わたしは主にこの2冊と講演録を参考にして「松場登美さんの仕事に学ぶ」という文章を書いて、松場さんの暮らしと仕事から学んで、地域学に取り込むことを試みました<sup>27</sup>。

前置きが長くなりました。松場さんは服飾デザイナーとして、島根県大田市大森町にある石見銀山生活文化研究所、ブランド名は「群言堂」という年商10数億円の会社を切り盛りされていますが、地域アドバイザー、観光カリスマ、文化審議委員に選ばれるなど、まちづくりに貢献した人としてもよく知られています。もっとも、ご本人は、「気持ちよく暮らしたいだけで、まちづくりをしてきたつもりはありません」と評価には納得がいかないようですが。

松場さんは30年ほど前に、名古屋からご主人の実家のある大森町に移り住みました。そのとき、親戚の人にかげられた言葉はとても厳しいものでした。「草の種は、たとえ落ちたところが岩の上であっても、そこに根を下ろさなければならぬ。」それほど大森町は住むに厳しい寂れた町に見えたのでしょうか。ところが、松場さんは町の空気を寂しいとは感じなかったそうです。自然の豊かさ、近所の人たちとの人情味あふれる付き合いや歴史ある町の佇まいにとっても感動して、何年か暮らすうちに、次のように思うようになったといいます。自分に授かった人生、授かった場所をよしとして生きていこう。この地に根を下ろし、それを幸せとして受け入れていけば、何かが見えてくるはず。ここで一生を暮らすのであれば、自分らしい生き方がしたい。周りの人たちとともに楽しい気持ちで過ごしたい、と。この講義の初めのところで引用した一節は、このような心構えで大森町で暮らしてきた松場さんの心境です。松場さんは大森町という土地や人々とどんな関係を築いてきたのでしょうか。その目に見えてきたのは何だったのでしょうか。

## 1. 松場さんが大事にされてきたこと

松場さんは今、1789年に建てられた阿部家というかつての武家屋敷で生活しています。阿部家の大森町での歴史は1601年に始まります。大森町は2007年に世界遺産に指定された「石見銀山」の一部で、かつての家々と町並みがある程度残っています。阿部家もそのひとつで、周囲には落ち着いた感じのいい雰囲気が漂っています。

松場さんはご主人とともに古民家を再生してきました。1軒目が現在の群言堂本店で、江戸時代には庄屋の家だったそうです。阿部家は6軒目です。阿部家と血のつながりはありません。それにしても、なぜ古民家再生なのでしょう。松場さんは次のように語っています。「わたしは、いつも古い家から聞こえてくる声のようなものを感じていました。」「家が再生されていくのと同時にわたし自身も再生されてきたような気がします。」「阿部家には、効率や便利さ優先の快適な暮らしはありません。でもここには、現代人が忘れ去ってしまった大切なものがあるのではないかと思います。わたし自身、ここで暮らしていると毎日新しい発見があり、この家の空気に包まれて癒されていると感じます。」「ここに出てくる「古い家から聞こえてくる声のようなもの」、「再生」、「空

<sup>27</sup> 松場登美, 2007, 「松場登美—石見銀山—足元の宝を見つめて暮らしをデザインする」, 西村幸男・埜正浩『証言・町並み保存』学芸出版社, 柳原邦光, 2010, 「松場登美さんの仕事に学ぶ」, 『地域学論集』第7巻第1号参照。

気」，「癒される」とは，どういうことでしょうか。

ところで，古民家再生といってもすべてを元通りに復元したわけではありません。かつて阿部家には格式ある長屋門がありましたが，松場さんは復元しませんでした。他を寄せつけないような高い壁ではなく，周囲の町並みや自然と溶け合うような簡素な門をつくりたかったからです。阿部家の玄関に足を踏み入れると，板に大書された「納川（のうせん）」の白い文字が目飛び込んできます。しとしと降る雨が小さな流れとなりそれが集ってやがては大河となって海に注ぎ込むように，様々な異質なものを受け入れていくことで海のように深く美しくなることを表現した言葉だそうです。玄関からすぐのところにある座敷をみますと，真ん中に大きな鉄の彫刻が置かれています。これは彫刻家の吉田正純氏の作品ですが，違和感はなく，静かな落ち着きを生んでいます。

驚かされるのは，あちらこちらで拾い物が利用されていることです。阿部家には広い土間の台所があり，大勢の人たちが集まって食事ができます。昔懐かしい立派な竈が並び，長い大きなテーブルと小さな椅子があります。実は，テーブルは廃校になった小学校の階段の手すり板を組み合わせて作ったもの，椅子も子どもたちが学校で使っていたものです。台所からお風呂への外通路の壁には，箆や籠など，使いこまれた生活道具がかけてあります。「世の中が棄てたものを拾おう。」これは松場さん夫婦のポリシーのひとつで，あちこちで拾ったりもらったりして，そのままか，手を加えて使っています。かつて生活の中で用いられていたものが，新たな形で美しく生かされているのです。松場さんはこれを「用の結果の美」として，この「用を果たした後の美しさ」，「人が毎日使い込んだ結果生まれ出る輝きを，何よりも美しいと思います」といいます。

松場さんはこうした精神のあり方を「復古創新」という言葉で表現しています。古いものをそっくりそのまま蘇らせるのではなく，それを生かしながら，自分の感性や時代性を加えて新しい価値観を創っていくというのです。阿部家はまさにこの精神を具現しているといえるでしょう。

## 2. 群言堂が目指していること

「群言堂」は衣料品と生活雑貨のブランド名です。本店建物は大森町の家並みの中にありますが，本社建物は見事な古民家とともに町並みから少し外れたところに山と田んぼに接して建っています。どちらも風景に溶け込んでいて，とても会社には見えません。それが社屋だと知ったときは本当に驚いたものです。

それにしても人口が500人にも満たない大森町で店を構えるとはとてつもなく大胆なことではないでしょうか。最初の店「ブラハウス」を今の本店建物にオープンしたとき，周囲の猛反対にあったそうです。1日数往復しかバスの便がなく，観光客も今ほど多くはなかったからです。それでも，松場さんは，「自分たちの表現の場は大森だ」というご主人の考えを信じ，「この町こそが自分に与えられた舞台だ」と受け入れました。2人には田舎の価値が認められる時代がきっと来るという夢があったからだといいます。この「田舎の価値」とは何でしょうか。「よいものは都会にある」とか「新しいものもいいものだ」という当時の人々の意識や時代の傾向に対する疑問は，今ならわたしにもわかります。しかし，「田舎の価値」となると，考えてもすぐにはわかりません。自分自身の感覚や心の奥深くに問いかけて，1つ1つ確認していくことを求められているような気がします。松場さんの著書でも，すぐあとに，「わたしはものを通して何を伝えたいのだろうか」という，ものをつくることの意味を自問する文章が続いていますので，確信にいたるまでには松場さん自身のなかでも問いかけがあったのではないのでしょうか。

松場さんは群言堂のすぐ近くに「無邪く庵（むじゃくあん）」という電気も水道もガスもない小さ

な家もっています。酒を飲み食事をしながら地域の人たちと語り合う場がほしいとの思いから手に入れたもので、大森町の中でも一番小さく質素な家だったといます。この家はほかにも「文明を排除した家」「ろうそくの家」「五感のよみがえる家」と表現されています。わたしにとって興味深いのは、この家の修復工事を終えたときの松場さんの心の動きです。家は以前とはまったく違った顔をしているのに、重ねた時間の記憶がそのまま残されているようで、じっと眺めていると、ふるえるような感動が湧き上がってきた。古いものをよみがえらせ、そのうえに新しいものを創る「復古創新」の精神は、まさにこのときに生まれたといます。

松場さんはさらに続けます。和ろうそくが暗闇をほのかに照らすなかになると、夜空に美しい光を放つ星がはっきりと見えます。静かに流れる水の音、そよぐ風の音までが聞こえてくるのです。あらゆる感覚が研ぎ澄まされてきます。それだけではありません。ろうそくのあかりを楽しみながら語り合っていると、誰もが素の自分に戻って、余分なものを脱ぎ捨て、素直に語り合えるようになります。この家では飾らない生き方をすることを学びました。そして、やがて「余計なものをそぎ落とし、素材そのものの美しさを引き出す仕事」がしたいと思うようになりました。こうして心に浮かび上がったのが人の身を包む服、身体にとって無理のない服をつくることでした。群言堂は「無邪く庵」から生まれたのです。群言堂という言葉自体は、「納川」と同じく中国人留学生から学んだもので、「みんながわいわい好きなことを発言しながら、1つのよい流れをつくっていくこと」を意味しています。「この町で、周囲の人とともに、よい流れをつくっていこう。」これが群言堂の原点なのです。

### 3. 「土地の声」、 「土地の力」

初めて松場さんの講演を聴いたとき、もっとも印象深かったのと同時に、実感として理解できなかったのは、「土地の声をきく」という表現でした。また、次の言葉も気になりました。「大地から力をいただいてもをつくっているような気がします」。「土地の力に守られて今日まできたような気がします」。松場さんのいう「土地の声」、 「土地の力」とは何でしょうか。松場さんの本を手にしたとき真っ先に心に浮かんだのは、この問いでした。

松場さんは服飾や生活雑貨のデザイナーです。しかし、松場さんはいいます。デザインの勉強はしたことがありません。実際、商品らしい商品ができるまでには何年もかかりました。それでも買ってくださいる人たちがいて続けることができたのです。ものの価値基準は商品そのものだけではありません。もの以外の何か、商品が生み出す空気感や売り場全体がかもし出す世界観などの何かが作用したのではないのでしょうか。そして、とくに「この土地での暮らしをベースにデザインしていたこと」が大きいといます。母として妻として生活者として生きる部分がないと、デザインの仕事も判断の基準も生まれませんでした。

デザインはメッセージです。「こう生きたい」、「こう考えている」、「共感してほしい」、そういうメッセージを服に包んで送り出してきました。だから自分にとってデザインの基本は「自分が着たい服をつくること」です。そして、自分だけでなく、理想とする暮らしや生き方を同じくする人に似合うようイメージしてデザインしています。みんなのための服をつくろうと思えば、誰にも似合わないもの、誰にとっても生きないものになってしまいます。しかし、「この人のために」と思ってデザインすれば、少なくともその人に似合う服ができます。「個を思う感覚が、普遍的なものにつながっていくと信じている」、と松場さんは述べています。

この確信はどこから生まれるのでしょうか。重要なのは、母・妻・生活者、そして「この土地で

の暮らし」です。問いへの答えは、「石見銀山で生まれるデザイン」と題した節にみることができます。まず生地とデザインとの関係が述べられています。生地とデザインを合わせて考えますが、生地ができあがってきたとき、想像していたのと異なる場合があります。そんなときは、最初に思った通りにするのではなく、やむをえない変化を受け入れて、生地をどうやって生かすか、頭を切り替えます。また、生地とデザインがすべてではありません。その土地の空気や気分にも影響されます。場が変われば、いいと思ったものがそうではなくなることもあります。「土地と自分との間に化学反応が起きているのかな」と松場さんはいいます。

わたしが注目したのは、松場さんの場合、人やもの、土地との関係において〈わたし〉が絶対ではないことです。それぞれの存在としての大きさを受け入れています。松場さんはいいます。「群言堂の服は土地から生まれる空気をまとっています。」大森町では、都会のようなヴィヴィッドな色はしっくりきません。むしろ山陰の少し暗めな空を写すシックな色がいい。直線は自然の中ではめったにみられません。それよりも曲線がいい。「わたしがこの町で見たもの、聞いたこと、感じたことのすべてが、デザインに影響を与えていると思います。」「毎日、自分の暮らしの中で美しいものを見る目を磨いておけば、都会のメーカーにはできない、自分なりのものづくりができると思っています。」土地で暮らすなかで確かな目が培われ、そこから自分なりのものができるというのです。

松場さんの美しさの基準は商品名に現れています。群言堂の商品には「山時雨」とか「石路（つまぶき）」のような「野の花」の名前がついています。野の花は自然の姿のまま、*「あるがまま、ただ咲いている。」*決して強く主張することはないけれど、個性的で心に響いてきます。「野の花に接しながら自然からいただくものの多さ」を日々感じるというのです。

群言堂には「鄙舎（ひなや）と呼ばれる茅葺の家があります。これはかつての豪農の家で、広島県から移築されたものです。通常は社員食堂として利用されていますが、ときに様々な形で人々が集まる場ともなります。移築したのは日本の当たり前で美しい風景を残したかったからだそうです。形だけの復元ではありません。「その家の暮らしそのものを引き継ぎたい。」観賞するのではなく、暮らしの場であり続けたいというのです。

次の言葉も興味深いものです。移築の際、解体された部材が組み立てられ、元の形を取り戻していくにつれて、家は心が満たされる空間となり、人が癒されるようになっていったといいます。阿部家の修復の際にも同じことがおきました。阿部家は松場さん夫婦が手を入れる前は、荒れた、とても人が住めそうにない廃屋でした。修復工事の途中までは「もう少し頑張っ。ちゃんと直してあげるから」と、「してあげる」という立場でしたが、修繕が進むにつれて家は品格を取り戻し、風格さえも醸し出すようになり、立場が逆転しました。今では「この家は、心の落ち着き、安心を与えてくれている」といいます。家の魂が蘇るのでしょうか。長い歳月を経る間に家に刻まれた何か、暮らしの記憶が人を癒すのでしょうか。松場さんはこれを「家の声」、「家の力」と表現しています。

松場さんと古い家や大森という土地の間には、生活においても仕事においてもこれほどまでに確かな感覚をともなった関係があるのです。これが松場さんのいう「田舎の価値」なのでしょう。群言堂は「土地に根ざしたものづくり」をポリシーにしていますが、それはこのような土地や自然に対する感覚や敬意から生まれたのでしょう。

#### 4. 地域について

松場さんには地域を何よりも優先して考えるという発想はありません。「まちおこし」や「地域活性化」という言葉にも違和感を覚えるようです。それよりも人や日常の暮らし、仕事を大事にして

います。町おこしや観光を日常生活とは別個のものとなし、自分の本業をほったらかして町おこしに励むことには疑問を感じるのだといいます。「一人ひとりが幸せで、楽しい暮らしができ、ビジネスが成り立てば、それこそが町おこしになる。」松場さんは、自分の本業をしっかりとやって、いい店をつくる、それが町おこしにつながる、と考えているのです。観光についても同じことがいえます。観光のために特別に何かをつくるのではなく、「暮らしている人々が、美しく魅力的な暮らしをしていれば、観光客は自然に集まってくる。」松場さんにとって生活者こそが主役で、日々の暮らしこそが大事なのです。

松場さんが地域に関わるのはこのような観点からです。その例を2つほど挙げておきます。ひとつは「鄙（ひな）のひなまつり」です。これは年に1度のイベントで、女性たちに田舎の自然の魅力や暮らしの素晴らしさに目を向けてほしい、女性が変われば地域も変わるという思いから始まりました。「田舎に暮らす女性の意識を高め、より豊かな暮らしを考える」をテーマに講演やシンポジウムを行い、最後を「鄙舎」での大宴会で締めくくりました。「ひなまつり」ですので、男性が世話し盛り上げました。当初はよそから嫁いできた女性たちしか参加しませんでした。やがて地元の人たちも都会からやってきた人たちも加わって大勢で楽しんだといいます。ところが、松場さんは10年目を区切りにやめてしまいました。イベントを通して得たことをそれぞれが暮らしの中で実現していく時期になったと考えたからです。今では家々の前には田舎の道具や野の花がさりげなく飾られて、人々の目を楽しませています。また、町の会合では女性たちから説得力のある面白い意見が出るようになったそうです。

もうひとつ、大森町では、「納川の会」というNPOを中心に1992年から年に1度、町民が集まって集合写真を撮り、町民カレンダーをつくって全戸に配付しています。少し高い位置から、その年その年の住民たちの笑顔を撮影した写真で、みんな顔を少しだけ上げて高いところを見つめています。何年分ものカレンダーを並べてみれば、姿が見えなくなった人もあれば、新たに加わる人もいるでしょう。まさしくこれは1人ひとりの顔が見える、美しい町の記憶です。町民でなくとも、写真を通して大森町に暮らす人々の生活が感じられて、感動を覚えてしまいます。写真には「We are here」という言葉が添えられています。「私はここにいます」ではなくて、「わたしたちは、ここにいます」です。これはどういう意味なのでしょう。

松場さんは次の文章を引用して説明しています。「人間の欲望の一番高いところにあるのは、『自己実現』と言われている。つまり『パーソナル・アイデンティティ』を追求していくということだ。だが、本当はもうひとつ先のレベルがある。それは『コミュニティ・アイデンティティ』だ。」この文章を読んだとき、自分達の目指しているものが「コミュニティ・アイデンティティ」だと確信したといいます。なるほど、松場さん自身、群言堂でしてきたことを振り返って、「私たちは人が集る、そういう場所づくりをしてきたのではないかと思います」と述べたことがあります。これまでしてきたことの意味がはっきりと見えてきたのでしょう。町民カレンダーを見ていると、人と人が結び合う場のある幸せが伝わってきます<sup>28</sup>。

## 5. 根のある暮らし

『群言堂の根のある暮らし—しあわせな田舎 石見銀山から』から文章を2つ引用します。

<sup>28</sup> 松場登美（他郷阿部家，群言堂）「歴史的遺産と地域づくり—地方の可能性—」（2008年6月25日講演），同「足元の宝を見つめて暮らしをデザインする—土地からの授かり物—」（2009年5月20日講演）。なお、「復古創新」、『地域学入門』49-50も参考になる。

根は、ふだんは土の中であって見えません。しかし、どっしりと根を張っているから、木はすくすくと伸びていきます。根さえしっかり張っていれば、いつかは芽を出し花を咲かせることができます。そして、果実も手に入れることができます。(163頁)

いま、こうして仕事をし、暮らしていくなかで、いちばん大事なのは、次の世代そのまた次の世代に何が遺せるかということではないかと思っています。遺すというのはお金や資産のことではありません。継続していくためにはそれも大事ですが、本当に大事なのは、暮らしや生き方ではないかと思うのです。いまは幼い子どもたちが大人になったとき、この町は小さいけれども素晴らしく豊かだということを知っていてほしいのです。(166頁)

ここでいう「根」とは何か、これはもう明らかでしょう。わたしは松場さんの講演や著書に心を揺さぶられました。これまで見ようとしてこなかった部分をみせられたような気がします。これからどこに目を向けていけばいいのか、どう生きていけばいいのか、大きな示唆を与えられたように思います。その松場さんが最近好んで用いられている講演のタイトルは、「足元の宝を見つめて暮らしを楽しむ」です。なるほど、と思います<sup>29</sup>。

以上、実践者である5名の学外講師の方々の取り組みとお考えを詳しく紹介してきました。「Ⅱ.なぜ、いま、地域なのか」と響き合っていることがよくお分かりになったと思います。わたしたちは、「今どこに目を向ければいいのか」「わたしたちにとって常に見つめ続けていなければならないものは何なのか」をずっと探し求めてきました。学外講師の方々はそれを示してくださったように思います。

## V. 東日本大震災から見えてきたもの—「いのち」を生きるということ

さて、次にこういうことを考えてみます。わたしの専門はフランス近代史、とくにフランス革命史で、大学院生の時にパリ第4大学に留学しました。そのときミシェル・ヴォヴェルという先生がゼミで歴史研究について興味深いお話をされました。暗いところで写真を撮るときフラッシュをたきますね。パッと一瞬光を放ってそこで浮かび上がったところをカメラが捉えるのですが、歴史研究もこれと似ているというのです。歴史家は史料を使って過去を明らかにしようとします。しかし、史料はきわめて限られていますので、フラッシュどころか、暗闇のなかでマッチをするようなものです。その一瞬、おぼろげに見えてきたものを捉えるわけです。そこに歴史家の技量と大きな限界があります。

このお話は非常に印象に残ったのですが、ある時、日本の社会学者の方が、スポットライトを例に出して、社会学が何をみようとしているのか、説明されました。スポットライトがあたっているところは、丸く明るい空間で、なにがあるのかははっきり見えます。しかし、重要なのは、その丸い空間の向こうの、光に照らされていないところにある。そこに何があるのか想像すること、それを捉えようとするのが大事なのだと。

<sup>29</sup> 群言堂の経営者である松場大吉さんの執筆された、石見銀山生活文化研究所編、2015、『ぐんげんどう 経 たて 緯 よこ』平凡社も参考になる。『緯 よこ』は写真集で、美しい風景とともに松場さんご夫妻の思想を物語っている。

この2つの話は、歴史学と社会学が前提にしているものの違いと、2つの仕事の重要性をよく示しています。現在を解明しようとする社会学は、ある部分は見えるという前提に立って、そこから先を見ようとするのですが、歴史学の場合、過去が対象ですから、そもそも何も見えないというところから出発しています。共通なのは、「暗闇」、すなわち「普段は見えないもの」をみようとしている点です。ただ、社会学は現場に行くとか、聞き取り調査をすとかできますが、歴史学ではそれは不可能です。ですから、「マッチ」が重要なのです。「マッチ」は歴史学でいう「できごと」「事件」に相当します。何か出来事が起こって史料が残ります。それがあからこそ見えるのです。歴史家は、集中し目を凝らして、ほんの一瞬ちらっと見えたものを捉え、そこに意味を見出さなければなりません。

東日本大震災は、とてつもなく大きな「できごと」なのではないでしょうか。わたしたちは「普段は見えないもの」を捉えて、「これから何を、どのような方向を、目指すのか」、じっくり考え、選択することを、求められているのではないのでしょうか。これから「地域学総説」で講演していただいた内山節さんと新妻弘明さんのお話を紹介します。お2人ともまさしく極めて優れた歴史学者や社会学者のような方です。

### 1. 内山節さん「自然について考える—『文明の災禍』ということ—」

内山節さんは哲学者で、講演をしていただいたときは立教大学大学院で教授を務めておられました。内山さんは講演で東日本大震災について自然の災禍だけでなく、文明の災禍もあったとして、次のように述べられました。自然の災禍は人間にとっては災害だが、自然にとってはそうではない。これに対して、文明の災禍、たとえば、福島第1原発の問題は人間の文明がつくりだしたものが人間の社会を破壊するということである。それは人間にとって災禍であるばかりか、自然にとっても災禍であると。

最初に「自然の災禍」について説明します。内山さんは宮城県気仙沼市で牡蠣を養殖している畠山重篤さんの言葉を紹介されました。畠山さんは被災直後に「それでも海を信じ、海とともに生きる」といわれました。この言葉は内山さんにとって衝撃的でした。畠山さんは漁師なのですが、「森は海の恋人」という言葉を掲げて、仲間とともに山に落葉広葉樹を植える活動をしてきました。森と川と海は一体的な世界であり、よい森とよい川が漁場としても豊かな海をつくっていくと考えたからです。ところが、今回の大震災と津波で、お母さんと仲間が津波にのまれ、海辺の集落も消えてしまいました。また、カキ養殖の関連施設のすべてを破壊され、所有していた船5隻も失ってしまいました。大変な打撃であり、ショックであったはずですが。ところが、畠山さんは震災後数日して「それでも海を信じ、海とともに生きる」というメッセージを出されたのです。しかも、このような捉え方は畠山さんだけではありません。他の漁師さんたちもそうなのです。

内山さんは、映像で見ただけで茫然自失し言葉を失ったというのに、漁師さんたちはなぜそういえたのだろうかと自問して、「津波との間に魂の次元で折り合いがついたのだろうか」という結論に至っています。しかし「魂の次元で折り合いがつく」とはどういう意味でしょうか。内山さんの解釈はこうです。

いったい何が大丈夫だと思わせたのかというと、それは漁師さんたちが身体で感じたこと、あるいは生命自体で感じたこと、だから生命力自体で感じたことととってもいいのです。つまり、人間たちが何かを感じ取るというのはおそらく3つのものがあって、1つは頭で考えて感じ取

る。この場合、頭で考えて認識するとでもいった方がいいのですが、もう1つ、身体で感じ取っていくという認識があって、さらにもう1つ、命自体で感じ取っていく認識がある。これを僕は生命性とか、ときに靈性とかいっています。

つまり、津波と折り合いをつけることを可能にしたのは、知性ではなくて、長年にわたる自然との取り組みの中で身体で受け止め学んできたことだ、さらにいえば、生命自体で感じてきたことだ。自然と向き合ってきた人々には、身体で自然をつかんでいく、命で自然をつかんでいく、そういう捉え方があるのではないか、それが漁師さんたちを支えているのではないか、というのです。

また、次のようにも説明されました。「ここには確かな関係の中で生きてきた人の力強さ、身体で知っている確かさがある。身体は確かな自然を見ていて、やっつけられるという確信をもっている」と。「確かさ」や「確かな関係」という言葉に注目していただきたいのですが、それらは、自然と向き合いながら身体を使って生活することを通して「いのち」の次元で獲得されたものだというのです。

次に「文明の災禍」についてです。福島第1原発事故を通してあらわになったこととして、以下の点を指摘されました。事故以前には、原発は遠いところにあるというイメージで、どこかリアリティがなかった。ところが実際にはすぐ隣にあった。事故は地域を人が住むことのできない空間に変え、過去から現在へ、そして未来へとずっと続いていくはずの人の営みと時間を永遠に止めてしまった。これからは原発立地地域や周辺地域に限らず、誰もが放射能に怯えながら、解決不能な重苦しい課題を抱えて、生きていかなければならない、そういう現実がいきなり目の前に現れてきた、と。自然の災禍は回復可能でも、文明の災禍はもう取り返しがつかないのです。イメージと現実との間には、実際にはこれほど大きな隔たりがあったのです。さらに、次のようにも述べられました。少し長くなりますが、内山さんのお考えをまとめてみます。

イメージの問題は原発だけにいえることではない。いろいろなものをイメージでつかんでいるだけで、本当のことを知らない、そういう形で社会が展開している。戦後の日本は高度経済成長の中でひたすら経済発展を目指してきた。経済発展すれば豊かになれるというイメージを誰もがもっていた。このイメージは単なるイメージではない。社会を支配し管理していくイデオロギーとして機能した。大震災はこのことに気づかせた。

そうしたなか表に現われてきたのは、日本の社会は完全に行き詰まっている、一緒に社会をつくり直そう、自分たちの生活の仕方も仕事づくり方も、人と人との結び方、自然との結び方も見直そう、地域も考え直そう、という動きである。たとえば、ソーシャルビジネスである。自分たちが考える社会的な使命を実現するために経済活動をしたい、そのためにどういう経済の仕組みをつくらなければならないのか、考えよう、みんなと一緒に地域づくりなどをしながら、自らも生活できるようにしていく、そういう楽しさの中で生きたいと思う人たちが現れてきた。

さらに自然との結び方を再考することである。自然ともに生きたいと願う、しかし何か起きたときに自然を被害者にしてしまうようなものを残しておいて、自然とともに生きるといえるのだろうか。大震災は人の生にとって根源的なものは何かという問いをわたしたちに突き付けたのである。このような動きのなかで課題として見えてきたのは、自然を認識していく場合でも、単に知性で認識するだけではなくて、身体でとらえる、さらには命自体でとらえる。その身体や命でとらえられたものをどう地域づくりに生かしていくのか、あるいは地域の復興に生かしていくのか、というこ

とである。

以上をまとめて、内山さんは次のように述べられました。自然であれ何であれ、これからどうい  
う関係の中で生きていくのか。これまでは、東京のイメージがあったり、消費のイメージがあつた  
り、豊かさのイメージがあつたり、そんなイメージの中に取り込まれて生きてきた。しかし、これ  
からはそうではないだろうという気がする。むしろ確かにつかみ取れる関係、そういうものを軸に  
しているんなものをつくり直していく。確かにつかみ取れる関係を知ったとき、その確かさのなか  
に、知性という頭で考えてつかみ取れる関係もあるけれども、身体を通してつかみ取っていく確か  
な関係もある。命自身を通してつかみ取っていく確かな関係もある。そういうことも回復しながら、  
これからどんな関係の社会をつくるのか、それが今回問われているという気がする。

要するに、内山さんは「確かな関係の再構築」が求められているというのです。「確かな関係」に  
ついて内山さんのお考えをもう少し踏み込んでみましょう。大震災からの真の復興とは何か。  
「大事なことは、まず、自分たちがつくっていききたい、自分たちが生きていききたい世界を、文学的  
に、文化的に語ることである。その語りのなかにこめられている思想をつかみとること」だ。「[復  
興の] グランド・デザインは、残されたもの、受け継いでいくべきものを見つめるところからつく  
られていく必要があるだろう。自然との関係を受け継ぐ。死者との関係を受け継ぐ。それらを受  
け継いでどんな町を復興させるのか。そのことを文学的、文化的、思想的に語るべきだ。わたしは  
そう思っている。」

少し補足説明をしますと、内山さんは日本の伝統的な社会観を次のように考えています。日本の  
伝統的な社会は自然と人間の社会である。自然は死者たちとともに人間と同格のメンバーである。  
「自然」と「死者」と「生きている人間」で作っているのが、日本の社会である。決して意見を述  
べることのない構成メンバーの意思を反映しながら、人は自治をするのであり、生きている人間た  
ちだけの論理で物事を決めるのではない。自然と人間の社会をどう復興させるのか、生きている人  
間と死者とを結ぶ社会をどう創っていくのか。これを出発点として生きている人間が生きられる社  
会を創ることが重要だ。内山さんのいう「確かな関係」は、このようなつながりや関係をベースに  
しているのです。

最後に、「システムが主体になった時代から、『確かな関係』が主体になる時代へ」という内山さ  
んの主張に触れておかねばなりません。福島原発の問題によってあらわになったのは、わたしたち  
の暮らしが巨大システムに支えられていること、このシステムがあまりにも巨大化・複雑化してし  
まい、人間の手に負えないもの、責任の果たしようのないものになっている、ということです。わ  
たしたちは「確かな関係」の対極にある巨大システムとどのように向き合うかという問いを突きつ  
けられているのです<sup>30</sup>。

## 2. 新妻弘明さん「地域とエネルギーから現代文明を問い直す—震災を体験して」

次に新妻弘明さんのお考えを紹介します。新妻さんの講演は、地震と津波に破壊され、瓦礫がえ  
んえんと広がるなかに、人の姿がポツンと小さく映っている映像から始まりました。新妻さんはい

<sup>30</sup> 内山節（哲学者）『『里』（ローカリティ）の思想と歴史性』（2011年6月22日講演）、「自然について考える—  
『文明の災禍』ということ—」（2012年6月13日講演）。ほかに内山節、2011、『文明の災禍』新潮社を参照。  
内山さんの思想を知る上で便利なのは、内山節、2012、『内山節のローカリズム原論—新しい共同体をデザイン  
する』農山漁村文化協会である。これは立教大学の大学院で行われた講義の記録である。より深く理解する  
には『内山節著作集』（全15巻）農山漁村文化協会が薦めである。

います。自然のとてつもない力と、それを前にしたときの人間の無力さ、小ささ。「もうわけがわからない。でも生きていかなければならない。」そういう状況に放り込まれてしまったとき、「みんな、必死で考える、考えるというか、身体で考える、身体で思う。」そして「これまで見えなかったものがいきなりあらわになった。」「いきなりあらわになったこと」とは、何なのでしょう。

新妻さんは、最初に、現代社会の問題点を指摘されました。現代社会は、様々な巨大システムに依存した社会である。「点滴社会」であり、「切り身社会」である、と。どういうことかといいますと、わたしたちは自分で生きてはいない。自分では何もしないで、システムによって生かされている。そのシステムとはお金でしかつながっていない。お金がなければシステムから、すなわち社会から切り離されてしまう。システムから遮断されると、あるいはシステムが破壊されると、自分ではもうどうにもできない。つまり、ちょうどベッドで点滴を受けている病人のようなものだ。自分では何もしないで、ただ点滴で供給される栄養源だけを頼りに生きている。だから、点滴が切れると、あるいは点滴のなかに毒が入ってしまうと、死ぬしかない。それと同じように、電力・水道・ガス・通信などの諸々のシステムから切断されると、生活できなくなる。だから「点滴社会」だということです。

また、日常生活が自然とつながっていないから、自分のところだけを見て、誰も全体のことを考えようとはしない。それは、スーパーで魚の切り身を見て、それが本当の魚の姿だと思ってしまうようなものだ。社会のごく一部だけ、人が生きている世界のごく一部だけしか見ていないにもかかわらず、それですべてがわかった気になっている。全体を思い描くことなどできない。だから「切り身社会」に生きている、ということです。

つまり、わたしたちは自分の生活に責任をもって生きていない、ということです。頭だけで考えて、それがすべてだと思っている社会、身体で考え、身体で思うことがほとんどできない社会に生きている、ということでもあります。

このような生活は科学に支えられています。しかし、新妻さんは、その科学的思考にも問題がある、といいます。というのは、学問は事実よりも理屈を重んじるからです。確かな科学的根拠がなければ、科学として考慮すべき「事実」としては認められません。そのため科学的には事実として存在しないことになってしまいます。また重視されるのはものごとを客観的に見ること、普遍的に考えようとすることです。どこでも通用する「普遍的な知」が重視されて、ある地域だけで確認されるような具体的事実は軽視されてしまいます。たとえば、東北地方は数百年おきに大地震や津波に見舞われ、大きな被害を出してきたにもかかわらずその事実が伝えられ活かされていない。どうして歴史的な知の断絶が起きてしまったのか。ある地域だけに限られる知を軽視して、地震発生のメカニズムのような「普遍的な知」だけを追い求めたことで具体から目が離れて、人間の力、科学の力を過信してしまい、「これだけ文明が進んだのだから、津波はこない」と思い込んだのではないかと、ということです。

ところが実際に大震災を経験して新妻さんが気づかれたのは、人は自然と向き合って、折り合いをつけて暮らしてきたこと。その自然の強さ、すごさ、ありがたさ、恐ろしさ、優しさ、です。また死が身近であること、死を見つめることが人生を考えることではないか、ということ。そして「命を託す」ということです。

例を2つ挙げます。まず自然と向き合って暮らしてきた人々のすごさについて、新妻さんは次のように述べています。

自然というのは時におっかないが、優しさもある。本当におっかないけれども、優しいところもある。みんなが言うのは、漁師さんなども、海に恨みはないといいます。あんなにひどい目に遭って、家族をみんな殺されて、恨みはないというのです。それに対して、原発とか東電、みんな憎い、憎い、憎い、といいます、東電が憎い。でも海には恨みがないというのですね。怖いということはあるが、恨みはないと。

このような人々は、自然を受け容れ、自然と折り合いをつけて生きてきたのです。新妻さんはまたこんな経験もされています。ある海辺の地域にためらいながら支援物資をもっていったときのことです。

それで、支援物資を持って行って、その施設の避難所みたいなところに行って、いやあ、このワカメはおいしくてね、うちの母ちゃんが買ってくるのがおいしいからね、と言いつけて入るわけですよ。そして支援物資をもらっていただけますかといったら、その漁師さんが、もう少し待っていてください、というのですね。彼らは幾らひどい目に遭っても海を見えています。もう少し待ったらワカメはすぐとれると、もうプロですから見ているのですね。もう少し待っていてくださいといわれた。救われました。こんなにひどい目に遭ってもそこに海の恵みはあるぞと。それを我々は町場の人たちのためにとってやっているのだと、だから、またとってやるから待ってなさいよ、といってくれた。ありがたかったですね。

新妻さんは、被災して「弱者」になった人たちに、支援者として助けにきた「強者」として接することに強いためらいを感じておられたようです。ところが、行ってみると、被災された人たちは弱者ではなかったのですね。「確かな何か」をもっている人たちだったのです。新妻さんは、人々の言葉や態度から、海を信じ、海とともに生きてきた人たち、自然としっかり向き合ってきた人たちの強さを感じとったのです。それで「救われました」とおっしゃったのです。

もうひとつ、「命を託す」についてです。新妻さんはひとつのエピソードを紹介されました。津波で家が流されて、ある家族が屋根の上に逃げていた。たまたま家が土手に流れついたので、お父さんが家族を岸に渡らせた。ところが、家が岸から離れてお父さんが一人屋根の上に残されてしまった。そのとき、お父さんはどうされたのか。満面の笑みを浮かべて「バイバイ」と言って流されていったのです。お父さんはそうすることで家族に「命を託したのです。」「生命体というのは子孫に命を託すことが最大の目的なのです。生命というものは、そういう風にできているのです」、と新妻さんはいいます。

このように新妻さんの脳裏に真っ先に浮かんだのが、「自然」と「命」と「死」なのです。そしてそれが展開される具体の場が「地域」だといいます。地域について次のようにおっしゃいました。

人は長い間ずっと自然と向き合い、死と向き合って、死者とともに暮らしてきた。地域とはそういう場である。単なる物理的な空間ではない。風土とともに形成されてきた様々な関係性から成り立っているのが地域であり、ここで人々は積み重なった過去とともに生き、子孫のことを考えて暮らしてきた。人の生を長い過去と自分を超えて続いていく未来とをしっかりと見据えながら生きてきた。だから地域には個人の意思以上のものがある。

地域はいわば「心の原点」であり、「文明の基盤」である。重要なのは、「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」である。だから、地域を離れてものを考えることはできない。地域で、地域から考える。地域を見つめ、地域を学ぶ。復興の原点とは、地域を生きる人々の心とは何かということだ。真の復興とは、「もう一度、ここで生きていこうということをつくること」である。

新妻さんは、今、「文明の分岐点」に立っているといいます。従来通りの形を続けて破滅するのか、それとも環境と共生する文明へと転換するのか。「重要なことは、舵を切ることだ。どのように舵を切るか、ということだ。それは、震災の教訓をどう活かすかということでもある。」そうだとすれば、どうすればいいのでしょうか。具体的に何ができるのでしょうか。新妻さんの提案は、地域で考えること、地域の人々の生活必需から考えることです。新妻さんはご専門も実践活動もエネルギーなので、「地域にあるエネルギーを地域のために生かす」(EIMY, Energy in my yard) ということで、自らの実践活動を例に挙げて次のように説明されました。

エネルギーには3種類ある。ひとつは国家規模のエネルギー戦略として数値や統計のみで表現され政策として検討される「戦略エネルギー」である。これには、たとえば、温暖化対策としてのCO2の削減問題が関わってくる。2つ目が商品として売り買いされ、利便性・価格・カロリー・ワット等の指標で採算効率が問われる「流通エネルギー」、すなわち、電力会社が供給する電力である。最後が「自給エネルギー」である。自給エネルギーとは、誰でもできる技術で、自らが当事者になって手に入れる安全安心なエネルギーである。例えば、薪ストーブや温泉の利用である。そこには生活必需のものを、自然の中で、自然の恵みを感じながら、自然と共生して、生産する喜びがある。人が互いに助け合って手に入れることができるものでもある。生活の豊かさとか食の豊かさとか、そういう多様な関係性で結ばれていることを感じながら手に入れるエネルギーである。

新妻さんは巨大システムのもたらすエネルギーを否定しているわけではありません。産業にも生活にも必要ですが、それだけでなく、自分の手で何とかできるエネルギーをつくっておくべきだということです。エネルギー量からみれば、巨大システムの供給するエネルギーの方がはるかに大きく、お金を払いさえすれば利用できるから便利です。「自給エネルギー」はとても小さくて手間がかかりますが、たとえ生活に必要な電力の1%を供給するにすぎなくても、震災のとき薪ストーブが暖を提供してくれたように、命をつなぐことができます。そのうえ、自給エネルギーの背後にある関係性には多様で深い奥行きがあります。長い人間の歴史を顧みると、暮らしを支えてきたのは紛れもなく自給エネルギーであり、その知と知恵は今もそれぞれの地域で蓄積され伝えられています。新妻さんはこのような2つのエネルギーを活用する形を「デュアル・エネルギー・パス」と呼んで、できるだけ自給エネルギーの比率を高めようということです。それが環境との共生につながる道であり、同時に人の生を支え、より豊かにしてくれるからです。

新妻さんが重視されている点をもう少し挙げてみますと、まず、他人任せにしないこと、誰もが当事者として生きることです。また、民俗の知恵、地域の知恵を活かすこと、自分たちが生きている大きな関係性を捉えて、トータルな自己を取り戻すことです。そして最後にこういうことをいわれました。

環境共生文明というのをつくりたいといけないといったときに、どんな社会システムでも、どんなもの、製品でも、どんな文明でも、一人一人の心にまで落とし込まなければ、本物ではな

いと思います。だから、何か非常に単純な原理を持っていけば自然に環境共生になるような、そういう仕組みというものを我々専門家とか知識人みたいな人がつくっていかないといけない。

私は、私の言葉でいうと、「いのちをいただき、いのちをいかす」、こういう気持ちというのが、これをただ一つの原理にしているんなことを考えていけば間違いないのではないかなと思います。(中略)何か非常に単純な原理、それをよりどころにしていくというのが、こういうときは重要なのではないかなって思います。

「いのちをいただき、いのちをいかす」は意味深い言葉です。ここでいう「いのち」は人間の命だけではなく。自然とともにある「生きとし生けるものすべて」です。人間もまた自然の一部であり、そういうものとして命を生かしきろう、ということです<sup>31</sup>。

### 3. 自然と向き合い、いのちと向き合う

以上が内山さんと新妻さんの講演の要旨です。そのなかで最もインパクトがあったのは、自然と向き合って暮らしてきた人々の強さです。三陸の漁師さんたちの現実を受け入れる態度、確信に満ちた言葉や海への信頼感です。あのような感覚はどこから生まれるのでしょうか。内山さんは、知性・身体性・生命性という認識の3つのレベルで説明されました。表現は異なりますが、思いは新妻さんも同様です。人間もまた自然の一部であり、そういう存在として、わたしたちのなかには、知性を超えた、言葉では説明できない捉え方があるように思います。「確かな何か」は、漁師さんたちのように自然と向き合うなかで、このような認識の仕方を通して得られる、ということでしょう。

お2人の講演は、自然と「いのち」との深いつながりと、自然とともにあることで過去から現在へ、未来へと続いていく「いのち」の永続性を感じさせます。こういう感覚があるとき、人は自ずと謙虚になるということでしょう<sup>32</sup>。

対照的なのが、イメージだけの社会、点滴社会、切り身社会です。それは様々な巨大システムに支えられた暮らしがいかに自然から切り離されているか、わたしたちがどれほど関係性を見失い、当事者として生きていないか、を物語っています。この隔たりをできるだけ埋めなければなりません。もちろん、内山さんも新妻さんも巨大システムを全面否定しているわけではありません。お2人がいいたいのは、人の暮らしと「いのち」を支えてきたものをしっかりと見つめて、暮らしのなかに少しでも自然とつながる部分をもとう、暮らしの場である地域から考えよう、自らを省みるとともに、社会のあり方を見直し、立て直そうということです。これはとても重要な提言だと思いません。

### 4. 人の暮らしと生から「真の復興」を考える

ここまで内山さんと新妻さんの講演と著作から「自然といのち」の重要性を確認してきました。ところで、この問題に関連して、先日、東日本大震災関係の文献で重要な指摘に出合いました。金菱清さんの『震災学入門——死生観からの社会思想』(ちくま新書、2016年)です。そのなかで、金菱さんはある問題を取り上げています。震災復興に向けて問題となったのは、大津波で2万人を

<sup>31</sup> 新妻弘明(東北大学名誉教授)「地域とエネルギーから現代文明を問い直す—震災を体験して—」(2012年6月20日講演)。ほかに新妻弘明、2011、『地産池消のエネルギー』NTT出版を参照。

<sup>32</sup> 同じような捉え方は、法隆寺の宮大工だった西岡常一さんの思想にも確認できる。西岡前掲書参照。

超える命が失われたという事実はどう向き合うのか、どのような復興対策を講じるか、ということです。これから金菱さんの著書から要点を抽出してみます。

たとえ数百年から千年に一度、あるいは数十年に一度だとしても、大津波で多数の人命が失われるのをなんとしても防ぐということで、国が立てた方針は2つあります。1つは10mを超える巨大防潮堤の建設、2つ目は、津波の浸水域を想定して住宅建設を全面的に規制する災害危険区域を指定し、津波の届かない高台に住宅を移転させることです。この方針に基づいて政府や自治体は総合防災計画を立てて、被災地の土地利用を制限しています。住民はそれに従わなければなりません。人の「いのち」を守ることを最優先した政策だといえます。

歴史を振り返れば、前例があります。防潮堤については、岩手県宮古市田老地区の10mの防潮堤がよく知られています。残念なことに効果はありませんでしたが。災害危険区域の指定と高台移転についても、明治と昭和の2度にわたる三陸大津波の後で、同じような措置が取られています。ですから、国の決定は、以前からある選択肢の1つなのですが、違うのはとてつもない規模です。巨大防潮堤の建設は計600箇所、総延長は400km、建設費だけで1兆円を超えます。維持管理費を合わせると、とんでもない額になるはずですが。この意味でも、政策の妥当性が問われます。

実際、津波を受けた被災地の当事者から疑問や強い反対の声が挙がっています。たとえば、仙台市の荒浜地区は津波にすべてを流されたところですが、更地に嵩上げて住み続けることを望んでいます。しかし、仙台市は7mの防潮堤と6mのかさ上げ道路を建設しても危険だとして、住民の希望を退けました。気仙沼市の唐桑地区の漁業集落や内湾の住民たちは、10mの巨大防潮堤建設に反対しています。住民たちは被災者ですから危険であることは重々承知しているはずですが。どうしてこのような判断をしたのでしょうか。

この問題は地域学総説でも、震災直後の2011年度に取り上げました。地域学部の日本史研究者である岸本覚先生が『『地域』の危機を歴史から考える』というタイトルで講義されたのです。岸本先生が設定された問題は、「地域は災害などの危機にどのように向き合ってきたのか」です。危機として取り上げられたのは、明治と昭和の2つの三陸地震津波で、震災への人々の反応を通して、「自然と人間の関係」、すなわち「自然観・災害観」を、また地域の復旧・復興の動きから「生活回復の中に見えてくる土地と住民との関係」を検討されました。以下がその概要です。

最初に、自然観・災害観について。近世の場合、自然と戦って生活を守るというよりも、自然が克服できないことを受け容れて、その上で対策を講じている。しかし、明治29(1896)年と昭和8(1933)年に大規模な地震津波を経験して、認識に変化が生じる。内務省や文部省の資料に、被害対応を国家の課題として、科学技術によって災害の惨禍を防止し軽減しようとする強い意識が現れたのである。震災後に住民が建立した石碑の碑文からは、被災地域の人々の意識にも変化があったことがわかる。明治の地震津波の場合、石碑は死者を供養するためのものだったが、昭和の石碑になると、「地震があったら津波の用心」、「津波があったら高いところへ逃げよ」、「此処より下に家を建てるな」など、知恵を働かせて惨禍をできるだけ小さくしようとしている。

次に土地と住民との関係について。津波の被害を完全回避するには高所移転しかない。しかしながら、近世には集落移動の事実は確認されていない。明治の津波を経験して、災害予防法として高所移転が検討されたが、実現は難しかった。集落を移動させた場合も、結局、元の場所に戻ってしまい、昭和津波で大きな犠牲を出している。なぜ住民は土地にこだわるのか。これについては、生活上の必要性が指摘されている。漁業や海運業で生活する以上、海から離れるわけにはいかないのである。

この事情は震災津波被害に限らない。火山噴火で地域が壊滅状態になった場合も、江戸期を含めて、結婚・養子縁組や救済金の受給方法など、知恵と様々な手段を使って、元の場所に「家」と「村」を再建している。こうした生活回復過程に、住民と土地との切り離すことのできない関係と、生活再建を可能にする地域の強靱な回復力をみることができる。

この岸本先生の講義を聴いて、わたしは次のように考えました。「自然と人間の関係」について、国家レベルの言説では、人間の意思と科学の力によって自然の脅威を克服しようとする姿勢が顕著です。これは江戸期の為政者の、自然を克服できないことを受け容れる態度と比べると、大きな変化で、認識と態度における「断絶」を確認できます。石碑からは、住民の意識にも変化が見られますが、住民は国家よりもずっと謙虚です。石碑の立つ場所が津波の浸水位置を示しているように、とにかくうまく津波から逃げようとしているのです。「土地と住民との関係」の場合、明治の震災後、確かに一度は高所移転する例があるなど、近世にはない行動もみられましたが、結局、元の場所に戻っています。壊滅的な被害にあっても同じ土地で暮らそうとする断乎たる意思は変わりません。ここでは「持続」を確認できます。

つまり、国家は科学の力で自然の脅威を克服する方向に意識を変えましたが、住民は、津波が来たらとりあえず逃げて、同じ土地に住み続けようとし、重要なのは、日々を生きていくこと、生活していくことであり、これが住民の判断と行動の大前提です。高所移転という考えは、一見、当然の選択のように思えますが、住民にとっては必ずしもそうとはいえないのです。自然に向き合う態度も重要です。自然は時に耐え難いほどの惨禍をもたらしますが、日々の命の糧を提供してくれるものでもあります。脅威があるからといって、スッと縁を切るわけにはいかないのです。ここまでをまとめますと、近代以降、国家と住民との間で、津波認識に大きな開きが生じているといえます。これが地域学総説で到達した理解です。

今回の震災を研究されている社会学者の金菱さんも同じことを確認されているのですが、さらに掘り下げています。住民たちはなぜ巨大防潮堤や高台移転に反対なのか。金菱さんは、多くの研究者の調査結果を引用しつつ、気仙沼の内湾地区住民の生活感覚を明らかにしています。金菱さんによれば、重要なのはやはり海と住民との日常的な関係です。気仙沼の住民は、海と陸とをあたかも地続きのようにつながった一体のものとして捉えています。自分たちの生活を支えてきたものは、陸地からではなく、海からやってきて、また海に出ていく。「海と切り離されて生きることなどあり得ない」という感覚です。したがって、巨大防潮堤建設や高台移転は、生活と海とを切り離すことで生活を難しくするだけでなく、「生きている」という実感をも失わせることとなります。津波という災厄を引き受けつつ、それを上回る恵みをいただいていた、それが「生きている」ということだということです。

住民の態度や感覚を国家の政策と比べてみますと、国家は「生命優先第一主義」の観点から海辺を「安全な高台や防潮堤」と「危険な海」とに分けて、防潮堤で守られた高台を生活の場に強制指定します。しかし、それでは住民たちは「生きられない」のです。どちらも「いのち」を重視していることに変わりはありませんが、大きな違いがあります。国家は、「いのち」を生物学的な意味で捉えて、津波からいかにして守るか、そこに着目しています。そしてこの見方を絶対視して他の見方をはねつけます。住民の方は、自然のありようを受け容れて、「自然と関係を結びつつ、いのちを生かすこと」を重視しています。「いのち」への向き合い方が異なるのです。

ところで金菱さんは興味深いデータを紹介しています。東日本大震災で津波に浸水した区域の海抜を全国に当てはめると、面積では国土の10%に該当します。人口では、総人口の35%、4438万

人が居住しています。国家が被災地に求めた基準を全国に適用すると、これだけの人が他のところに移住しなければなりません。これは実現不可能なことです。そういう無理なことを国家は被災地に強制しているのです。現実的に判断すれば、津波の危険性を完全に排除するのは不可能なのです。だとすれば、津波の危険性と「いのちを生かすこと」との間でいかにして折り合いをつけていくのか、それが課題だ、と金菱さんはいうのです。

このような指摘を考慮に入れれば、国家の見方や基準にも一理ありますが、それを絶対視して被災地に一律に適用することには無理があります。むしろ、地域の事情に応じて、住民の意向を踏まえて、誰もが知恵を出し合える形で決定すべきではないでしょうか。「いのち」への向き合い方一つではないのです。

## 5. 自分のなかにあるものを素直に表現すること―「たんぼぼの家」の試み

「いのち」について、東日本大震災ではありませんが、「いのちを生きる」という観点から、「たんぼぼの家」の播磨靖夫さんのお考えを紹介します。

播磨さんは元毎日新聞の記者で、現在は「財団法人たんぼぼの家」理事長をなさっています。播磨さんにも授業で講演をしていただきました。また、2013年に地域学部で日本ボランティア学会を共催した時にも語っていただきました。そのときの講演で、播磨さんは自らの基本的な姿勢を次のように語られました。「遠いところ、弱いところ、小さなところへ身を置くことが自分の人生のスタンスです。よく分からなくなったら、そういうところに身を置いた方がいろんなものが見えてきます」。そうして播磨さんの目に見えてきたのが、人間の都合で破壊される自然、障がいのある人や過疎の村のこと、軽視されがちな「地域で育まれてきた知」です。いずれも近代化のなかで無視されたり取り残されたりしたのですが、そこにこそ社会を変革していくための芽、チャンスがある、と播磨さんはいうのです。

続いて「たんぼぼの家」の活動をお話しされたのですが、そのなかから、わたしが特に重要だと考えるものを2つ紹介します。ひとつ目は「わたぼうし音楽祭」です。これは障がいのある人たちがつくった詩に音楽の好きな若者たちが曲を付けてみんなで歌う音楽祭です。「自分たちの歌を好きなように作り、好きなように歌っていい、それが音楽だ」ということで、音楽を通して障がいのある人たちの思いを伝えようという試みです。わたしは講演でこのお話をきいて、是非参加したいと思って、昨年、奈良市で開催された「わたぼうし音楽祭」に行ってみました。会場はとてもいい雰囲気でした。ステージに上がっている障がいのある人も、一緒に歌っている人も、実に気持ちよさそうでした。

そこで強く感じたのは、障がいのある人たちにとって、胸のなかにあるものを素直に言葉にして、仲間とともに歌うこと、あるいは自分の歌をみんなに歌ってもらえることが、いかに大きな喜びであることか、そうやってみんなと気持ちが1つになることがどんなに幸せなのか、ということです。わたし自身も「なるほど、これでいいんだ」と納得して、ずいぶん気が楽になりました。「自分の思っていること、感じていることを素直に表現すればいい」ということです。

2つ目は「エイブル・アート・ムーブメント」(可能性の芸術運動)です。これは「アートを通して、誰もがもっている隠れた可能性・天分を開花させ、仕事につなげ、人間としてのプライドを獲得する運動」です。障がいのある人たちがいろいろなアート作品を好きなように作ります。それを気に入った人が買って、お店に飾ったりしています。あるいは、企業が商品にしています。この場合も、作者には、自分のもっているものを素直に表現する喜びと自己肯定感があるように感じまし

た。それだけではありません。障がいのある人たちは、率直に表現したものが評価され仕事となることで、つまり、社会とつながることで、自分自身に、自分の才能に、そして自分の芸術的な行為にプライドをもつようになるといいます。

言葉を換えれば、まさに「生きている」という充実感になっていると思います。芸術がわかる専門家がいて、その人のモノサシにしたがって「素晴らしい」と思っているわけではなくて、作品を創る人も、それを買って楽しむ人も、みんな自分のモノサシで判断して、素直に気持ちを表現して、互いにつながっています。つながりを生んでいるんですね。これこそ「人の幸せ」というのではないかと思うのです。

講演に戻りますと、播磨さんは、東日本大震災に大きなショックを受けたが、新しい意識の目覚めもあったとして、それが何か、手短かに語られました。それも含めて、播磨さんのお考えをまとめますと、播磨さんが理想とされているのは、わたしたち一人ひとりが自分の「いのちの可能性」を生きること、「いのち」の充実ということです。その第一歩は自らの「内なる声」を聴くことです。人間がすべて、自分がすべてではなく、人間も生き物の一つであり、地球生命系のなかの存在であることを自覚して、自然への畏敬の念と謙虚さをもって、自然と「いのち」に向き合い、「他者」の声に耳を傾ける。そこから自ずと自発性や自律性が生まれてくる。このような内から発するものにしたがって、自分たちで生活の仕組みを作り直し、新しい生き方、新しい共同体の倫理をつくらうというのです。

最後の点について少し補足しますと、社会を変えようとするとき何を基軸にするかといえば、人のつながりを分断する「モノ・カネ・制度」ではなく、「人・生活・生命」です。常にそこを見据えて、地域の生活のなかから再編していくことです。そのためには、専門知とアマチュアの自由な発想、身体的直感、暗黙知とを組み合わせて、地域の現場で知を鍛えつつ問題を解決していくことが必要だ、ということですね<sup>33</sup>。

## 6. 「いのち」を生き切る—「かあさんの家」の活動

最後に先ほどの新妻さんの「いのちをいただき、いのちをいかす」を実践の観点から考えてみます。取り上げるのは、NPO 法人ホーム「ホスピス宮崎」理事長である市原美穂さんの「かあさんの家」の活動です。

「かあさんの家」では、末期ガンのような、余命幾ばくもない高齢者、ほかの施設では受け入れてもらえないような人を普通の民家でお世話して看取るという実践活動をしています。「かあさんの家」の基本理念は、人生の幕を閉じる時に、自分の生きて来た場所で、馴染みの人に囲まれて過ごしたいという願いに応じて、生活者として最期まで生き切るよう支えること、なによりも本人の意思を尊重し、本人が決めたことを最善だと思ってサポートすること、家族についても、安心して寄り添って、悔いのない看取りができるような場を提供すること、です。市原さんは次のようにいいます。

家族の方には、暮らしの中で看取るということを自分達の中に取り戻して欲しい。病院で看取る時もモニターは見ないで、ちゃんと手を握って、声をかけて欲しい。安らかな生と死を支え、

<sup>33</sup> 2013年6月29日に開催された日本ボランティア学会鳥取大会のセッション1「不確かさを生きる技法—ボランティアな生き方と地域」に登壇された播磨靖夫さんの講演と『日本ボランティア学会 2014 年度学会誌』(2015/3/31)に掲載された「日本ボランティア学会の歩みとその背景」での発言から。

命を受け止める地域へ。死は特別なことではありません。みんな死ぬ。それは自然な経過です。  
(中略) 死は敗北ではなくて、その人の人生がキチンとそこで完結するわけですから、それが物語として、充実できていれば、敗北じゃないと思うんですよね。

市原さんは、死を自然なこととして、「一人ひとりがいのちを最後まで生き切ること」<sup>34</sup>が、本人にとっても家族にとっても幸せなことだと考えて、「かあさんの家」という形でサポート体制を整えられたのです。

市原さんの活動は、このほかにも多くの点で地域学に示唆を与えるものです。1 つだけ紹介すれば、市原さんは、人生の最期を人らしく迎えることができなくなった人々の苦しみに出合って、制度に頼ることができないなかで、やむにやまれぬ気持ちから動き出し、次々と現れる問題の一つひとつに対応しながら、知恵を絞り、情報を集め、ネットワークをつくって、人として生きられる状態をつくりだしてこられました。最初に何とか学というような専門分野があつて、それをもって現実に臨んだわけではないのです。「いのち」という切実な問題に向き合つて、何とかしようとする思いが、市原さんをして必要なことを学び、つなぎ、組み立て、実践させたのです<sup>35</sup>。地域学の目指す「実践の知」とは、まさしくこのようなものではないでしょうか。地域学は様々な実践から学ばなければならないのです。

## 7. 『地域学入門』に足りなかったこと

最初に述べましたように『地域学入門』を出版した時、何かが足りないという思いがありました。それが何なのか、はっきりしてきました。地域学が常に見つめ続けるべきもの、立ち返るべきもの、それは究極的には「いのち」です。自然とともにあるいのち、自然の一部であるいのち、です。「いのちをいただき、いのちをいかす」ということです。そのためには、謙虚に自然と向き合うこと、死と向き合うこと、自然と人間との関係を捉え直すこと、そこから生活を考え直すことです。地域学はここから始まり、ここに帰ってくるとわたしは思います<sup>36</sup>。

## VI. 地域をとりもどす—「確かなもの」を求めて

### 1. わたしたちの生と地域

それではわたしたちの考える地域学を紹介します。地域学という名称を用いる以上、自ずと「地域とは何か」という問いが出てきます。既に明らかになったように、地域は人間の営みと何の関係もない物理的な空間ではありません。それ以上のものです。「地域とは何か」という問いは「わたしたちの生にとって地域はどのような意味をもっているのか」という問いでもあるのです。

おそらく誰もが「人として安心して幸福に生きていきたい」と思っているはず。このような願いや生き方と関わるものとして地域を考えるとすれば、目で見ることができてわかりやすい自然

<sup>34</sup> 「生き切ること」については、マリー・ド・エヌゼル、1997、『死にゆく人たちと共にいて』白水社を参照。

<sup>35</sup> 2013年6月29日と30日に開催された日本ボランティア学会鳥取大会「ほぐす、編みなおす—ボランティアな生き方が紡ぐ地域の新たな可能性」の第2セッション「課題を希望に変える技法—ボランティアな生き方が創造する地域のつながり」における市原美穂さんの講演「地域から生えてきたホームホスピス～かあさんの家の実践から～」。なお、2017年度地域学総説では「地域における看取り文化の創造」と題して講演していただいた。ほかに、竹川俊夫、2011、「地域がつくる福祉」、『地域学入門—つながりをとりもどす—』202-228を参照。

<sup>36</sup> 内山節、2015、『いのちの場所』岩波書店を参照。

環境や社会環境だけでなく、人と人との結びつきや互いに支え合う関係といった、目に見えず、わかりにくい要素も考慮に入れるべきでしょう。こうした様々な条件や要素が合わさって、人にとって何らかの意味をもった空間を「地域」だと考えています。

このような「地域」は、自然環境や生態環境に人間の働きかけが加わって歴史的に形成されてきたはずで、すなわち、「人として安心して幸福に生きていきたい」という思いは同じでも、その具体的な形、ありようは、地域によって異なります。たとえば、わたしたちは何かを食べて「おいしい」と感じます。これは誰にも共通する感覚ですが、何を、どのように食べたときにそう感じるかは、人によって、あるいは地域によって違います。それと同じです。こうしたそれぞれの地域がもっているものを、地域の「個性」とか「特性」、あるいは「地域性」ということができます。

また、次のように考えることもできます。視線を「生身の人間」である自分自身に向けてみれば、自分のなかに決して普遍的とはいえない地域性や地域文化とでもいうべきものがあることがわかります。食習慣や味覚だけではなく、言葉遣いや振る舞い方、ものの考え方や感じ方などもそうです。「精神の習慣」とか「心の習慣」といわれるものです。これらの多くは育っていくなかでいつの間にか身につけたものです。決して自分の判断で選び取ったものではありません。それだけに人から指摘されるとか、批判されるとかしてはじめて気づくことが多いのです。こうした感覚や無意識的な判断の基準を生み出す場があって、そこから人は個性の重要な部分を獲得していると思われる。

そうだとすれば、地域は生のあり方や生きているという実感を生み出す何かをわたしたちに与えているといえるのではないのでしょうか。この意味で、地域は「生の充実」や「わたしの幸福」「わたしたちの幸福」にとって欠かすことのできない「拠りどころ」だといえるでしょう<sup>37</sup>。

しかしながら、そう感じていない人もいるはずで、それどころか、束縛するものとして地域を忌避することさえあります。確かに、地域には人の振舞い方、考え方や感じ方を「制約」するところがあるからです。一例を挙げれば、地域学総説では授業の最後に学生に感想や疑問を書いてもらうのですが、次のようにコメントした学生がいました。「わたしの両親は地域なんていないといっています。」これは地域に対する強烈な嫌悪感、拒否感です。この学生のご両親にとって、地域は人を縛り苦しめるものなのです。

さらに別の意味でも、わたしたちと地域性との関係は微妙です。わたしたちは進学や就職、転職や結婚などで、住むところが変わります。外国で暮らすこともあります。誰もが同じところで生まれ育ち死んでいくわけではありません。むしろ「人はみな移動する存在」だと考えた方がいいでしょう。移動するとともに新たな地域性を受け容れ、自分のなかに積み重ねていくということです。濃淡はあれ、複数の地域性を生きているということです。

また、人の移動に着目すれば、次のように考えることもできます。移動する人々の存在は、地域において当たり前だと思われていた何かを揺さぶり、微妙な変化をもたらします。人やモノ、情報の移動、それにとまなう「文化的なもの」の移動によって、地域は常に変化にさらされているということです。ですから、人も地域も「閉じたもの」「不変のもの」としてではなく、ある程度、変化に対して開かれていると見た方がいいでしょう。これが「移動の視点」です。詳しくは『地域学入門』第6章をご覧ください<sup>38</sup>。

<sup>37</sup> 吉村伸夫、2011、「文化現象としての地域一生の充実を求めて」、『地域学入門』第3章参照。

<sup>38</sup> 「移動の視点」については、筆者にはずっと気になっていることがある。地域学部にかつて在籍された韓燕麗氏（関西学院大学）の指摘である。韓氏は、2009年度の地域学総説で「地域とは脱構築のタームである」と

このように地域学では地域性を人の生にとって不可欠なものだと考えていますが、そうだとすれば、地域性の多様な側面、人の生との微妙な関係をしっかりと見据えて、できるだけ「誰もが、一人ひとりが、生きやすい状態」にしていかなければなりません。地域学は、まずは地域性とそれが人の生にもつ微妙な意味とを認め尊重するところからスタートします。

それでは、どうすれば地域性を把握できるのでしょうか。なにが地域を作り出しているのでしょうか。最初に考えるべきは、自然環境です。自然環境は、地域の「土台」とでもいうべきもので、わたしたちの生活はこの「土台」の上で営まれています。生活のあり方も人の考え方や感じ方も、要するに文化の総体が、程度はともかく、「土台」によって枠づけられているのです。この意味で、自然環境は地域を形成する諸要素のなかで最も重要なものです。しかし、その一方で、人間は自然に対して働きかけ、暮らしをつくってきました。地域はこのような人間の活動が刻印され蓄積された歴史的所産でもあります。地域は、自然環境と人間の営みが重なるところで、両者の相互作用から生まれ、変化していくと考えられます。地域を理解しようとするとき、自然と人間の営みとの関係のありようから考察を始めなければなりません。『地域学入門』では、第2章で地域を捉える「客観的・構造的視点」としてこの問題に言及しています。

次に、地域というとき、どのような空間を考えればいいのでしょうか。先ほども述べましたように、客観的に見れば、地域は、自然環境や社会環境、人と人との結びつきを含めて、人の活動を通して生まれた、何らかの意味あるまとまりをもった、曖昧な空間だと思われれます。行政区分のようにはっきりと線引きできる空間でも、あらかじめ大きさを特定できる空間でも、ありません。これを主観的に考えれば、「地域」という言葉を口にするのは、何か問題があって何とかしなければならぬと感じたときや、こうあってほしい、こうしたいと思ったときです。ということは、どんな問題や願望を想起するかに応じて、なんらかのまとまりや関係が「地域」として認識されているということなのです。

具体的にいえば、小さいところでは、日常生活の場である集落や町、「地元」かもしれません。つまり、「ローカル」な地域です。あるいは、場合によっては、もう少し大きな、関西や関東などのような空間かもしれません。さらには、東アジアとかヨーロッパというように、国境を越えたとしてもなく大きな空間かもしれません。このような大きな空間は「リージョナルな」地域(region)です。つまり、地域とは、国家の枠組みに収まらないか、国家とは異なる、なんらかの意味あるまとまりをもった空間だということです。主観的にいえば、そのように「感じられる空間」です。ついでにいえば、わたしたちはつい都道府県や市町村など行政単位で考えがちですが、その必要が十分にあるならともかく、必ずしも既存の制度的枠組みを前提にしなくてもいいのです。わたしたちは大規模な市町村合併を経験したのですから、行政の枠組みで発想することに大きな限界があることは明らかです<sup>39</sup>。

---

題して授業をおこない、自分の国を離れてマイノリティとして生きる華僑と華人をとりあげ、そのアイデンティティの問題に迫った。冒頭で、誰もが同じであることを求める国民的アイデンティティや国民文化、そしてそれを前提にした見方への違和感を表明して、「地域」が国家・国民のミニチュア版にならないよう警鐘を鳴らした。韓氏にとって「地域」とは、政治的なものではなく、流動的ではっきりとした境界線をもたない、緩やかなつながりである。だからこそ、国家の重苦しさ、生きにくさを緩和するものと期待しつつ、「地域は人々が生きるための未知なる空間ではないか」と述べている。〈地域学〉はこの点を切り開いていきたい。柳原邦光, 2009, 「地域学総説の挑戦 4」, 『地域学論集』第6巻第2号。

<sup>39</sup> 明治以降の市町村合併がどのようにして小さな地域を破壊してきたかについて、赤坂憲雄, 2010, 『婆のいざない 地域学へ』柏書房, 214-218を参照。

次に、地域について考えるとき、何が検討の対象になるかを考えてみます。地域の問題としてもっとも認識され易いのは、雇用問題のように生活の基盤が揺さぶられたときです。つまり、経済にかかわる問題です。生活に直結しますからとても重要です。この場合は、比較的わかりやすいですね。つまり、こういうことです。わたしたちはローカルな場で日常生活を営んでいますが、生活の場は同時にもっと大きなもの、国家レベルの決定や全国的な動き、さらにはグローバルなもの結びついていきます。ですから、ローカルな日常生活の場から考えるときにも、国家の諸制度や経済構造など、生活を枠づけている枠組みや構造を視野に入れて問題を検討しなければならない、ということなのです。

また、「経済的なもの」のほかにも、「生きにくさ」、「息苦しさ」、「物足りなさ」といった「目に見えない問題」もあります。「暮らしを楽しみたい」、「こうありたい」という願望もあります。人の生き方や文化に関わることも、地域を考えるとき、検討すべき重大な問題なのです。

以上の2点をまとめていけば、わたしたちの生と地域は、経済だけでなく文化を含めて、複雑な構造と関係性のなかにあるということです。地域学はこうした点を視野に入れて問題に取り組みなければなりません。

## 2. 地域に向きあう作法

次に地域を考えようとするとき、どこに足場を置けばいいのでしょうか。まなざしをどこに向けてべきでしょうか。この問題については、「地域学総説」の学外講師の方々に大きなヒントをいただきました。講師の方々は何らかの形で地域に貢献してこられた「実践者」なのですが、その語りは学生たちの心を強く揺さぶります。どうしてでしょうか。「実践者」に共通しているのは、生活から遊離したところで問いを立て、考え、実践してきたわけではないことです。自分のなかにある欲求や願望、自分自身の問いから切り離された営みではありません。その切実さがわたしたちに「確かなもの」を感じさせるのではないのでしょうか。私たちが学んだのは、まずは自分の足元から、生活の現場から考えることでした。それでは、生活の現場から考えることがなぜそれほど重要なのでしょう。

『地域学入門』では、家中茂先生の第4章「生活のなかから生まれる学問—地域学への潮流」が真正面からこの問題に取り組んでいます。要点を紹介すれば、次のようになります。

問題は近代の知のあり方である。西欧から導入された学問は、社会で起こる出来事を自分自身の生き方や問題から切り離して考えることを前提にしている。自らが問題の当事者であることを放棄して、問題とは無関係な立場に立って考えることで「客観性」を確保しようとしてきたのである。わたしたちはこのような知を学校や大学で学んできたが、そうすることで真理や優れたものは自分の生活から離れた別のところにあるという感覚を身につけた。生活から切り離して問いを立て考えるようになった。この自分自身の問いから切り離された知のあり方は、人の切実な問いに応えるのではなく、生きていくときの倫理や判断の基準として十分だとはいえない。というのも生きることは当事者として暮らしの全体性のなかで考えることだからだ。人は日々生起する諸問題に直面し、そのなかでもっとも適切な解決方法を探し求める。暮らしの現場では、近代の知のように問題の外に身をおいて考えることはできない。問題のなかで、自分に向き合い、自分を問い直しながら解決しなければならない。

生活で重要なのは、自分のおかれた状況を理解し、そこから問題を把握することだ。日々の具体的に複雑な状況のなかで確かな判断ができるようになることだ。それには判断するための目安が必

要だが、重視すべきはまずは自分の身体や生活から得られた「ものの見方」である。生活の現場から立ち上がる知、自然のなかで身体で獲得された知である。人にとってこれこそが確かな知であり、人々を結びつけ変えていく力となる。というのは、日々の生活のなかで自分自身にとって切実な、向き合わざるをえない課題と格闘しながら、人は何かに気づくからである。この「気づき」を通して他者とつながるからである。また、自然のなかにあるとき、五感を介して何かを他者と分かち合い深め合って、自分も他者も変わっていくからである。この「気づき」とそれを通して生まれるつながりが、次の行動を促すのだ。

こうした知の捉え方は学問の捉え直しを迫る。生活のなかで一人ひとりが日々体験するリアルさ、切実さを直視して、生活の必要と切実さに応える学問が求められている。それが地域学である。地域学は「実践の学」であるが、自分自身の生き方を脇において実践はありえない（「生活からの視点」）。

以上が「生活からの視点」の骨子です。わたしはこの見解に説得力を感じています。どこに足場を置いて考えるべきか、なぜそうなのかを実に明瞭に語っています。もちろん学問的な知を全否定しているわけではありません。特に今必要とされているものこそ生活の現場で獲得される知ではないかと思うのです。ここでは視点が大きく転換しています。これまでの地域の説明では、しばしば地域の外に立って、地域を客観的に捉えようとしてきましたが、「生活からの視点」では、視点は地域の中で生きる一人ひとりの人間に移っています。それも近代的な個人ではなく、自然の中で、身体を通して感じ考える生身の人間です。こうした人間をこれから〈わたし〉という言葉で表現することにします。

それでは、〈わたし〉はどのようにして地域に向き合えばいいのでしょうか。仲野誠先生の第5章「生きられる地域のリアリティー—反省の学としての地域学を目指して」は、人が地域の存在も意味もなかなか実感できないことを率直に認めて、〈わたし〉の〈いま、ここ〉から地域を捉えようとします。第5章の要点は次の通りです。

本来、人はみな〈いま、ここ〉で他者との関わりなくしては生きられない。必要なことは自分はそのなかで生きている関係性やつながりに気づくことだ。あるいはそれらを回復して、生きているという実感のある状態を実現することだ。「拠りどころ」であるはずの地域を自分の手に取り戻すことだ。そのために、一見すれば私的なものにみえる〈わたし〉の〈いま、ここ〉から自己の生き方を反省的に捉えつつ考えてみよう。〈わたし〉の〈いま、ここ〉を様々な角度からながめて相対化してみよう。人の振る舞い方や規範を生み出す社会的な構造がある。空間的な関係性がある。過去から未来へとつながる時間もある。社会的な構造、空間的關係性、時間のなかに〈わたし〉の〈いま、ここ〉を位置づけて、自分がどのような関係やつながりのなかで生きているのかを考えてみよう。そうすれば自ずと「みんなに関わること」が見えてきて、「公共的な視点」にたどり着くことができる。それはまた地域に存在する様々な問題に気づいて、それを乗り越えるための知恵を生み出すことにもなる。

地域学は、「自分の誇りや生きがい、よろこびを自らの手に取り戻すための態度を醸成する学問」、いわば「態度や作法としての地域学」である。重要なのは自己へと向かう内省的なまなざしである。それは自分自身をもう1人の自分が冷静に見つめる、そんなまなざしである。このまなざしが〈わたし〉のなかに見出すのは、近代社会が前提としている、他者から独立した確固たる自己というよりも、他者が幾重にも織り込まれた〈わたし〉である。〈わたし〉は他者とつながっていて、他者を絶えず織り込みながら存在している。人は他者と関わることで、このことに気づき、ともに変容するのである。言い換えれば、〈わたし〉は他者から、「地域」から、「あなたはどうか生きようか」と問

われているのである。このようなまなざしと他者認識をもつことが、様々な関係性とつながりを取り戻すために必要なのである<sup>40</sup>。

最後の点を説明しますと、自分自身をよくよく見つめてみれば、自らの意思で学び取ったものだけではなくて、いつの間にか家族や近所の人たち、学校や仕事などを通じて身につけた考え方や感じ方があること、自然や社会のなかで、地域のなかで自ずと身につけたものがあることに気がつきます。つまり、自分をつくりあげているのは、自分に固有のものというよりも、自分自身が生きている様々な関係やつながり、すなわち「他者」だということです。人と関わることで、人はこのことに気づき、何かを学び吸収していくのです。それは「みんなに関わること」、すなわち「公共性」を自分のものにするということでもあります。それはまた、自分の生き方を問われているということでもあります。こうしたプロセスを経て「いま、ここで、生きている」という感覚を取り戻すことができるということです。

これが「〈わたし〉の〈いま、ここ〉からの視点」です。まさに「地域に向き合う作法」としての地域学だといえるでしょう。

### 3. 様々な視点で地域を捉える

ここで地域を捉える視点をまとめてみます。視点というのは、「誰もが生きやすい状態」を実現しようとするとき、どこに立って、何を見据えながら考えるか、ということです。これまで4つの視点を提示しました。「移動の視点」、「客観的・構造的視点」、「生活からの視点」、「〈わたし〉の〈いま、ここ〉からの視点」です。これらの視点は2つに大別できます。1つは、観察者が地域の外に身をおいて、一定の距離をとって観察しながら、地域性を客観的に捉えようとする「客観的・構造的視点」です。これは近代科学のオーソドックスな方法です。他の3つの視点の場合、観察者は、地域のなかにあつて、地域を生きる当事者の一人として問いを立て、地域を捉えようとしています。

『地域学入門』で「客観的・構造的視点」に立っているのは、第7章「地形から地域を読む」と、第8章「経済が地域に及ぼす影響」です。2つの章に共通しているのは、日本全体の社会経済的な地域構造とその長期的な変化を捉えようとしている点です。これは「〈わたし〉の〈いま、ここ〉からの視点」や「生活からの視点」では見えにくいものです。時間的にも空間的にも大きな捉え方で、大きな構造のなかにそれぞれの地域を位置づけて、地域の「現在」を捉え、その将来像を考えようというのです。日本全体のようなナショナルな空間や、日本を越えるグローバルな空間のなかに地域を位置づけ、地域間の関係性・重層性を重視して地域を捉えようとするのです。「地域だけを見ては、地域はわからない」からです<sup>41</sup>。

<sup>40</sup> 内山節さんも同様の指摘をしている。多様な関係をつくることは人間の本質に属し、関係をもたなくなることは人間の自己否定であり、それらの様々な関係のなかで、他者から働きかけられることによって、人間は自分の存在の意味を感じとっている、と。そして他者について次のように述べている。「他者から働きかけられている自己。この他者にはいろいろなものがある。自然も重要な他者だろう。自然とともに生きてきた人たちは、自然からの働きかけのなかで自分が存在していることを知っているし、この関係こそが自分を自分たらしめている重要な要素である。もちろん他の人々も重要な他者だ。私たちの多くは他の人々から働きかけられているなかで仕事をしているし、暮らしをつくりだしている。もちろん自分も他者に働きかけている。それは自然という他者に対しても同じことだろう。この働きかけられ、働きかける関係のなかで、私たちは生きているのである。文化という他者からの働きかけもある。歴史という他者からも、死者という他者からも私たちは働きかけられている。そして働きかけている。」内山節、2011、『文明の災禍』新潮社、144-145。

<sup>41</sup> 歴史学研究では、たとえばフェルナン・ブローデル、1991-1994、『地中海』(全4巻)、藤原書店や川北稔、2016、『世界システム論講義—ヨーロッパと近代世界』筑摩書房、またグローバル・ヒストリー研究が参考になる。

これに対して、他の3つの視点は、地域を生きる〈わたし〉の願望や〈わたし〉が抱える様々な問題を重視して、生活空間のような小さな空間をじっと見つめ、そこで諸関係やつながりを捉えようとしています。そして、そこから自分自身の生や暮らしと、ナショナルなものやグローバルなものとの関係を捉えようとするのです。『地域学入門』では、第4章、5章、6章がこの視点に立っています。この視点は内山さんの捉え方とよく似ています。

内山さんは「大きな世界」から「小さな世界」への視点の移行が進んでいるといいます。最初に大きな世界を構想し、それとの関係で小さな世界を見ようとする視点から、自分たちが暮らし、責任もてる小さな世界を大事にしながら、小さな世界のネットワークとして大きな世界を見るという視点への移行です。小さな世界に足場をもって、そこから大きな世界を捉え直そうというのです<sup>42</sup>。

このような視点には重要な役割があります。地域という枠組から考えると、ついつい一人ひとりが見えなくなり、地域に埋没しがちですが、〈わたし〉から考えることで一人ひとりの人間を救い出し、そこから地域の抱える問題を照らし出すのです。つまり、〈わたし〉から離れた問い、生活から離れた問いではないのです。そして、こうして見出された問題が検討の対象となる地域の広がりや決定し、どのような対策を用いるかを考える上で大きな役割を果たすのです。

さらにいえば、このような視点に立てば、地域という名のもとに〈わたし〉を否定したり、押し殺すことを求めることはできません。何のための地域なのか。〈わたし〉を軽視したり否定したりして、地域に存在意義があるでしょうか。

もう1つ、「歴史的視点」を加えたいと思います。というのは、1つには、長期的な時間のなかで地域をみる必要があると考えるからです。地域をつくりあげているもののなかには、ほとんど変化しないか、100年とか数百年、さらには千年を超えるような長期的な時間のなかでゆっくりと変化するものがあります。また、もう少し短い、数十年といった中期的な時間で変化するものも、ごく短期間で急激に変化していくものもあります。つまり、すべての過去が現在と同じ関係をもっているわけではないのです<sup>43</sup>。過去の持続する時間の長さの違い、この意味での多層的・多層的な時間から地域を見たとき、地域はどのような顔を見せるのでしょうか。地域が何によって支えられているのか、維持すべく努めなければならないもの、変化のなかで消えていくことを受け入れなければならないもの、あるいは変化しなければならないもの、そうしたものが見えてくるのでしょうか。

「歴史的視点」の必要性についてもう1つ補足すれば、歴史というとき、国家やもっと大きな空間を視野に入れた歴史が想起されますが、生活者にとって、足元の歴史、自分たちの小さな世界の歴史もまた重要です。過去の世界や過去の人々とのつながり、自分たちの生活のしくみ、その根底にある「精神の習慣」を感じ取ることでできる「気づき」としての歴史です。自らをよく知るための歴史です。わたしたちが地域を「とりもどす」ためには、この歴史性の回復が不可欠です。これは学外講師の方々のお話を思い出していただければ、よくお分かりかと思います。

#### 4. 「地域学」の目指すもの

それでは、地域学は何を目指しているのでしょうか。わたしたちが「人として安心して幸福に生きていく」ためには、地域性を含めて、何がしかの条件が必要です。この条件とはなにか、それを

<sup>42</sup> 内山、『「里」という思想』100-102。

<sup>43</sup> フェルナン・ブローデル、1995、『歴史入門』太田出版、18-19。このほかに、フェルナン・ブローデル、1989、「長期持続—歴史と社会科学—」、『フェルナン・ブローデル [1902-1985]』新評論、15-68を参照。

把握し実現するにはどうすればいいのか、こうした点を考えることは地域学の基本的な仕事です。これを人間の関係についていえば、わたしたちは、人と人との結びつき、支え合う関係と、そのための場を必要としています。このような「関係」と「場」に必要な諸条件とそれを実現する方法を考えるのも、地域学の役割です。つまり、地域学の独自性は、一人ひとりの「生の充実」や「わたしの幸福」「わたしたちの幸福」の実現を、「誰もが、一人ひとりが、人として生きやすい状態」の実現を、地域と地域性、そして歴史性を尊重しつつ考えることにあります。その際、地域学が常に見つめ続けるべきもの、それは「いのち」です。自然とともにある「いのち」、自然の一部である「いのち」です。「いのちをいただき、いのちをいかす」ということ、「いのちを生かす」ということです。謙虚に自然や死と向き合い、自然と人間との関係を捉え直して、そこから生活を考え直すことです。

ところで、地域は、〈わたし〉が従属すべき絶対的な、不変の存在ではありません。地域は現に在るもの、「現実の地域」であると同時に、未だ実現していない、こうであってほしいと望まれるもの、「望まれる地域」でもあります。地域学はこの隔たりをしっかりと認識し、これを埋めるべく絶えず現実の地域を見つめ再検討します。そのためにあらゆる学問分野と、生活の場から立ち上がってくる「生活の知」を含む、あらゆる知が動員されるのです。視点としてはすでに述べた5つの視点のいずれも欠かせません。正確に言えば、それらが補い合って初めて地域学の目的を達成できるのです。

以上から、地域学を次のようにまとめることができるでしょう。「いのちをいただき、いのちをいかす」こと、「自然とともにあるいのちを生かす」ことを究極の目標に、「誰もが、一人ひとりが、人として生きやすい状態」の実現を目指して、地域の構造と特性を客観的に把握しつつ、人の暮らしと一人ひとりの思い(意思・欲求・願望)を重視して、「現実の地域」に内在する諸問題を探り出し、その解決を図ること、5つの視点から「望まれる地域」の実現に寄与すること、です。

したがって、地域学は、「まちづくり」や「地域活性化」といった住民活動や政策テーマと密接な関係がありますが、その次元にとどまるものではありません。こうした活動や政策の根源に存するものへの自覚的な問いかけを促すのです。そうだとすれば、「根源に存するものへの自覚的な問いかけ」とは何でしょうか。わたしたちが今切実に求めているものは何でしょうか。これまで述べてきたことを集約すれば、わたしたちが直面している今日的な課題とは、『地域学入門』のサブタイトルにもなっているように「つながりをとりもどす」ということです。別の表現をすれば、「確かな関係を再構築すること」です。

## VII. おわりに

それでは「おわりに」に入ります。『地域学入門』の最も重要な検討課題のひとつは、自分の立つべき位置はどこなのか、まなざしをどこに向けるべきか、ということでした。わたしたちが学んだのは、「いのちをいただき、いのちをいかす」ということ、「一人ひとりがいのちを生かす」ことでした。そのために目を向けるべきは、自然を含めた自分の足元であり、そこからまなざしを空間的にも時間的にも広げていくことです。自分の足元、すなわち、自分自身を、自分の育ってきたところを、生活しているところを、よく見てみよう。そこを足場として、生活する当事者として、考え行動してみようということです。それと同時に、生活の場を粹づけている大きな構造や関係性を捉えようとするまなざしも欠かせません。このような複眼的なまなざしをもってはじめて「抛りどころ」としての地域を自らの手で取り戻すことが可能になるでしょう。

『地域学入門』で提示したのは、人として様々な関係やつながりを取り戻し、創造し、ともに生きていくための「まなざし」、「態度」や「作法」です。「諸関係」や「つながり」のなかで、「人と人との関係、つながり」が重要であることはいうまでもありません。このほかに、わたしたちが忘れがちであるだけに、より重要になるのは、「自然との関係」や、死者を含む「過去との関係」、歴史性です。これらは切り離せませんが、「自然との関係」の重要性については、もう説明する必要はありませんので、「過去との関係」についてももう一度確認しておきます。

わたしたちの生は分厚い過去の堆積の上にあります。過去はわたしたちと否応なくつながっていて、わたしたちを支えると同時に制約してもいます。このことをしっかりと認識しなければなりません。それは、真摯に過去に向き合って、わたしたちと過去との複雑で微妙な関係を知る努力をすることです。そうすることで、わたしたちの生を過去に向かって、同時に未来に向かって広げることができます。永続する何かとつながることができます。

同じことは、様々な関係性を捉えようとするまなざしの重要性についてもいえます。わたしたちが目を向けるべき暮らしの場は狭いように見えますが、そうではなくて、もっと大きな、様々な空間との間に深い影響関係があります。今回、紹介したお話はみな、そのことを示しています。この関係性を捉える努力をすることもまた、わたしたちの生を広げることになります。

人に対して、自然や過去や様々な関係性に対して自分を開いていくことが、わたしたちの手で「確かな関係」を再構築し、できるだけ「誰もが、一人ひとりが生きられる」地域にしていくために必要なことです。地域学は「実践の学」ですが、実践とは、この過程における一人ひとりの内省から政策までのすべてをいいます。

今日紹介しました地域に向き合うときの「まなざし」、「態度」や「作法」は、出発点だとわたしは考えています。様々な学問分野の動向、生活の現場での動き、とりわけ大震災以後の人々の動きを見て思うことは、苦悩のなかで、今、新たな希望への道程を歩み始めたのではないかと、ということです。この歩みをよりいっそう確かなものにしていかなければなりません。

この講義では、学外講師の方の経験や実践活動をたくさん紹介しました。なぜかといえば、そこから「何が重要なのか」を抽出し、学んで、地域学のなかに組み込んでいくためです。「地域学に輪郭を与える」とか「地域学を創る」とは、こういう作業の地道な繰り返しではないかと、思っています。この営みは、地域学の理論的体系化ではありません。理論とか体系化という形で提示されると、どうしても「こうでなければならない、こうしなければならない」というニュアンスをともないます。

今回提示した地域学は、「〈わたし〉の〈いま、ここ〉からの視点」や「生活の視点」、「地域のなかで、地域とともに考える」という表現が象徴しているように、「一人ひとり」の思いや願望、知恵やアイデアを尊重する「実践の学」であろうとしています<sup>44</sup>。また、わたしたちの時代性に向き合うとともに、「具体の学」（結城登美雄）としての側面をもとうとしています。絶対的なものではありません。ここまで語ってきたことはあくまで提案です。「一人ひとり」の参考になればと考えています。

最後にお伝えしたいのは、わたしたちの「地域学」はまだ一步を踏み出したにすぎないということです。次の一步、二歩が重要です。地域学部では、家中茂先生を中心にして科学技術振興機構—社会技術開発センターから予算をいただいて、鳥取県の智頭町とプロジェクトを進めています。名

<sup>44</sup> これこそ人権の核心だと筆者は考えている。トドロフ『啓蒙の精神』を参照。

称は「自伐型林業と生活支援サービスを核とした生業・生活統合型多世代共創コミュニティモデル」といいます。このビッグ・プロジェクトは、わたしたちの構想する地域学を地域のなかで実践する試みです。地域学が次のステージに進むための重要なチャレンジだと、わたしは思っています。「地域学の挑戦」はパート2に入ったのです。成果がはっきりするには、少なくとも2~3年は待たなければなりません。それで、今日は、プロジェクトの内容を説明した資料を用意しましたので、時間のある時に目を通していただければと思います。

それから地域学部の『地域学論集』の最新号に掲載される、わたしの論考を用意しました。タイトルが「地域学講義」となっていますように、今年度の地域学総説でおこなった講義の原稿に詳しい註をつけたものです。いわば、今日の講義のダイジェスト版です。よろしければ、読んでみてください。それではこれで終わります。